

会報

創刊号

1972.3.31

越谷市郷土研究会

目 次

一	発行のことば	越谷市長	島村平市郎	
二	会報の発行を祝す	越谷市教育長	藤倉 豊	
三	発行をよめる	越谷市郷土研究会長	大野伊右衛門	
四	会報発行に當つて	同 幹事長	木村信次	
五	文化の灯	同 理事	八島晃正	
六	報 告	越谷市立図書館長	木村信次	
七	研究会と史跡めぐり概況			
八	研究会			
九	町中行事	町口仁礼	11 P	
一〇	町中行事	町中行事	11 P	
一一	町中行事	町中行事	11 P	
一二	町中行事	町中行事	11 P	
一三	町中行事	町中行事	11 P	
一四	町中行事	町中行事	11 P	
一五	町中行事	町中行事	11 P	
一六	町中行事	町中行事	11 P	
一七	町中行事	町中行事	11 P	
一八	町中行事	町中行事	11 P	
一九	町中行事	町中行事	11 P	
二〇	町中行事	町中行事	11 P	
二一	町中行事	町中行事	11 P	
二二	町中行事	町中行事	11 P	
二三	町中行事	町中行事	11 P	
二四	町中行事	町中行事	11 P	
二五	町中行事	町中行事	11 P	
二六	町中行事	町中行事	11 P	
二七	町中行事	町中行事	11 P	
二八	町中行事	町中行事	11 P	
二九	町中行事	町中行事	11 P	
三〇	町中行事	町中行事	11 P	
三一	町中行事	町中行事	11 P	
三二	町中行事	町中行事	11 P	
三三	町中行事	町中行事	11 P	
三四	町中行事	町中行事	11 P	
三五	町中行事	町中行事	11 P	
三六	町中行事	町中行事	11 P	
三七	町中行事	町中行事	11 P	
三八	町中行事	町中行事	11 P	
三九	町中行事	町中行事	11 P	
四〇	町中行事	町中行事	11 P	
四一	町中行事	町中行事	11 P	
四二	町中行事	町中行事	11 P	
四三	町中行事	町中行事	11 P	
四四	町中行事	町中行事	11 P	
四五	町中行事	町中行事	11 P	
四六	町中行事	町中行事	11 P	
四七	町中行事	町中行事	11 P	
四八	町中行事	町中行事	11 P	
四九	町中行事	町中行事	11 P	
五〇	町中行事	町中行事	11 P	
五一	町中行事	町中行事	11 P	
五二	町中行事	町中行事	11 P	
五三	町中行事	町中行事	11 P	
五四	町中行事	町中行事	11 P	
五五	町中行事	町中行事	11 P	
五六	町中行事	町中行事	11 P	
五七	町中行事	町中行事	11 P	
五八	町中行事	町中行事	11 P	
五九	町中行事	町中行事	11 P	
六〇	町中行事	町中行事	11 P	
六一	町中行事	町中行事	11 P	
六二	町中行事	町中行事	11 P	
六三	町中行事	町中行事	11 P	
六四	町中行事	町中行事	11 P	
六五	町中行事	町中行事	11 P	
六六	町中行事	町中行事	11 P	
六七	町中行事	町中行事	11 P	
六八	町中行事	町中行事	11 P	
六九	町中行事	町中行事	11 P	
七〇	町中行事	町中行事	11 P	
七一	町中行事	町中行事	11 P	
七二	町中行事	町中行事	11 P	
七三	町中行事	町中行事	11 P	
七四	町中行事	町中行事	11 P	
七五	町中行事	町中行事	11 P	
七六	町中行事	町中行事	11 P	
七七	町中行事	町中行事	11 P	
七八	町中行事	町中行事	11 P	
七九	町中行事	町中行事	11 P	
八〇	町中行事	町中行事	11 P	
八一	町中行事	町中行事	11 P	
八二	町中行事	町中行事	11 P	
八三	町中行事	町中行事	11 P	
八四	町中行事	町中行事	11 P	
八五	町中行事	町中行事	11 P	
八六	町中行事	町中行事	11 P	
八七	町中行事	町中行事	11 P	
八八	町中行事	町中行事	11 P	
八九	町中行事	町中行事	11 P	
九〇	町中行事	町中行事	11 P	
九一	町中行事	町中行事	11 P	
九二	町中行事	町中行事	11 P	
九三	町中行事	町中行事	11 P	
九四	町中行事	町中行事	11 P	
九五	町中行事	町中行事	11 P	
九六	町中行事	町中行事	11 P	
九七	町中行事	町中行事	11 P	
九八	町中行事	町中行事	11 P	
九九	町中行事	町中行事	11 P	
一〇〇	町中行事	町中行事	11 P	

表紙方ツト解説

発刊のことば

越谷市長 島村平土中郎

このたび 越谷市郷土研究会が会報を発刊するにあたり 会員の皆様方のご苦勞と深い研究にたいし、まして心から感謝を申し上げる次第であります。

かつて私も この会とは行動を共にし、史跡めぐりに参加した事もありますが、会員の皆様方のなかには 専門家でない方も多く見受けられましたが、熱心に説明を聞かれ、研究し、時には参考意見を述べ、或は即言し理解を下さる等、誠に敬服に存じておりました。

会員の方々が広く史跡を履渉し、史実を探りその結果を会報を通じて発表し、多くの方々に愛読されることを期待致します。

そしてやがて、この会報が尊い記録として、将来立派な文獻となり、後世の人々に大きな役割を果たすことを確信するものであります。

会報の創刊を祝す

越谷市教育長 藤倉 薫

郷土研究会の当市における役割は大きい。創刊するところによると既に史跡めぐりも四十回、研究発表会も三十回であると。共に東武地区に先鞭をつけていると聞く。

会員も遠く宮代、春日部、岩槻、又は吉川三郷並八潮草加浦和或は東京圏にも及ぶと。それのみならずこの越谷地区に關係ある史実の追求には広く旧武野野台域に渉り、歩を進められ地方史綱明の先端を開く。その研究意欲は実に篤くべき事である。

こうした事実は近隣都市に及ぼす影響は各所に、郷土研究会の発会やら協力やら将亦訪問先に於ける貴重な文獻の閲覧等一般参観者との異なる所が多々あることを目にする。

これも当市の誇りであると同時に益々その研究が結実して社会に及ぼす影響は更著として喜ぶ次第である。これ等の事どもが会報を通し公開され愛読される事は社会教育上から見て極めて重要な事柄なの

である。

これにつけても想うことは「越谷市の史跡と伝説」の草稿に当り、各地区内の教職員が絶力を挙げて編集された一書が、当該地区のヒントを与えているが、時既に去り、新旧交替の折とて、古きを温めて新しきを知る意味に於いて各愛好者に一本を贈ることも意味ではあるまいと考える。

文化遺産の価値の認識は兎も角として、地区に居住する我々として、史的概況を展望する意味に於いて意欲深きものがあることを信じ、ここに会務各位の玉着を見る日の一日も早からんことを期待して、お祝いのことばと致します。

発行をよろこぶ

越谷市郷土研究会長

大野 伊右衛門

又しい念願が叶つてこんな嬉しいことはない。越谷市郷土研究会発足当時の苦勞を共にした数人の発起人たちの熱意を今、胸に浮かべて話ります。

あれから回を重ねることと給付と回、その間史跡

めぐりの四十回、研究発表の約三〇回、其他随時研究記録の発表公開等、この間幹事並に委員の企画と立派な決断、並々ならぬ結晶が会報となって広く公開されますことは、私の最も慶びとするところであります。

県誌としての「シラコバト」を初め、県の文化財の指定、又は市の指定と歩を進めている中に、一部専門家や趣味の方々のみならず、市内に住む一般の方々にも関心を寄るため、広く会務を募つたところ、今日では百四拾名になんなんとしております。この発展振りに心ひそかに喜びを感じ、且つ会務の絶えざる研究は地方史の明瞭に傾る大きな足跡を残しつつあることは、已に認められて居るところでございます。

この熱意と努力の玉着が、この会報を通しお聞かれ、新しき歴史の創造へ貢献出来ると云う素晴らしい現実を帯えて良くぞご近きつて戴いたと感謝しております。今後とも会務発展の研究と精進とをお願いし、永くこの会報がすくすくと伸びる様お祈りし、御祝の言葉に喜ばせて戴きます。

終りにこの会報が回を重ね、後日更に尊い文庫として越谷に遺る事は何よりの樂しみと存じます。

会報発刊に当って

幹事長 永村 信 次

ようやく会報創刊号を発行し、お約束を果たし得たことを喜びとするものであります。

越谷を知りたいという欲求で集まった教人が、古くからある伝説および資料を尊重し、これらを郷土愛の観点から、調査研究する事が必要であるという見解に賛同し、

昭和四十年三月 当会を組織するにいたしました。

当会の目的とするところは、市内研究者の連絡を図り、資料の調査研究および文化財保存の協力また機関誌の発行、其の他座談会の開催など、郷土の越谷に貢献することにあるのであります。

現在の会報は、郷土を知りたいと云う市民が主でありまして、各々の立場に立つて郷土越谷の歴史を足で調べ、この歴史の流れの中に、現在を補え更に将来を可能な限り、適宜に見透す糧としておられることと思います。

草加越谷子住の元よ

文化の灯 あかあかと上れ

越谷市郷土研究会理事

八 島 晃 正

(埼玉日報記者)

私は浅草蔵前の生まれだ、東京で生まれ、東京に育った。終戦後越谷を祖当してもう二十七年になる。だから越谷は私の第二の故郷になった。

広い畑が麦が熟れ、黄金の波打つ水田、胡瓜やトマトが夏空に熟して来ると、私は武蔵野の一角越谷の土に限りない魅力を感じることになった。自然に古代の争が知りたくなる。

路傍の寺にしゃがみ込んで、元禄や永正時代の墓を窺がす。夜碑を窺す。棚像や佛面を拝観する。年表を繰るのが次第に楽しみや一つになった。

或る冬の日、竹藪で替わした墓を探していた。老婆が大きな声で、また今日も狂人がうろついていると家人に話してゐるのを聞いた。

又大相模地区はその昔、古戦場で（正倉院御物の写本）で、その後別府が置かれ、国司がいて豪族が

往み、従つて古蹟がある筈だと主張して人々から、「何を素人が」と嘲笑をかったこともある。

私には時間がない。

素人の調査研究には限界がある。又悉る文献にも自然と限界がある。調査が不十分な事は判りながら、私は、私なりの根拠で臆面もなく「越ヶ谷町秘話」や「越ヶ谷今昔物語」などを書いた。

汗顔の至りである。

私は全く一つの捨て石。だが捨て石でもそれなりの価値がある時があれば幸いである。

研究とは試練の連続、失敗の連続である、あぐらをかくことは許されない。

私の結核である。

新聞記者はニュースを足で書く、どんな引き金ニュースでも、その真実を探るために、考古学もそれと同一のようだ。

今回、市郷土研究会が機関誌第一号を発行。正に飛躍である。幹事諸兄の絶えざる努力に深く敬意を表すると共に、喜びの余り

「越谷の文化の灯よ、高く上げよ」と叫びたい。

江戸時代の学者、山中樵庵は水郷越ヶ谷の美に打たれて暫く脚を越谷に留め、遂に「越ヶ谷八景」を詠んだ。

私も越ヶ谷の美、田園の美、森林の美、河の美に魅せられた一入である。

郷土愛が次々に湧んで来る。

もう一度言う。

「灯よ 永遠に!!」

樵庵のつぶやきなのである。

報告

郷土研究会はと歳になりました
そしてこのように歩みました。

幹事長

水村信次

(市立図書館長)

昭和四拾年度(スタートの年です。)

① 研究発表

昭和四〇・四二四

方言について 大野 会長

五二四

越ヶ谷御殿について

越谷市沿革年表配布 同前

六二二

埼玉県東部地区

古代人の住居 新井英彦理事

七二五

御所の諸問題 本間 理事

新井家文書プリント配布

八月 休講

四〇・九一

鈴久について 八島 幹事

一〇・三〇

越谷よもやま話 大野 会長

〃

シラコバト 水村 幹事

一・二八

会田出羽と越谷 本間 理事

〃

芭蕉と越ヶ谷 大野 会長

昭和四十一年度(第二年度目を迎えました。)

研究発表と史跡めぐりとをかねて行いました。

昭和四一・一八

大相模古代住居について。

高崎 会長

シラコバトについてのプリント

配布。終って新年会を催す。

今年から史跡めぐりも初めました。足で歩いて知るこ
とが生きた歴史につながり、地元の仕事は素朴で面白い事
ばかりだといふと云う事に誘われて

第一回史跡めぐり(四一年二月廿二日)

場所 大相模不働尊 会田家資料配布(校訂版)

この史跡めぐりに、特色として毎回郷土資料編とし
て当該地区に関する文庫を集めた冊子を参加者全員に
配布し見学の果として居りますので、当寺院の沿革や
周辺の状況がわかるので好評を得ております。

参加者の意向も該心にあれ且つ当事者も気付けな
い事などもあるので、近頃では相方の刺激材となつて来
ました。見る人も見られぬ方も真剣そのものです。一
歩前進と云うところではあるか。

番回 号致	年 月 日	場所 社は因板碑等他所
26	昭和四年四月廿七日	大相模不動尊
27	昭和四年六月廿二日	石川新太左門氏の定縁寺神社
28	昭和四年七月廿七日	坐落寺の表下立回廊氏を
29	昭和四年九月廿六日	越々谷学久存豆神社の例
30	昭和四年十月廿四日	八条大井良鋪八条神社蔵 川後和井田八幡神社蔵 旧岩付大経通和寺の蔵、中島 兵衛蔵
31	昭和四年三月廿二日	五蔵村陸蔵寺蔵の蔵、京長橋
32	昭和四年四月廿六日	臨濟内教神社、宝生院、西光
33	昭和四年六月廿八日	二層林一公板碑石塔婆
34	昭和四年七月廿六日	川和、日光街道浪三壁水
35	昭和四年九月廿七日	野島、淨山寺、金剛院
36	昭和四年十月十一日	大治、安國寺
37	昭和四年十一月廿九日	行田市科部王古蹟群、大馬 たま翁科部王古蹟群、大馬

番回 号致	年 月 日	場所 社は因板碑等他所
38	昭和四年二月廿八日	清生院、地蔵院、清康院
39	昭和四年三月廿八日	吉川院、道徳の百庚申塔
41	昭和四年四月廿五日	大興寺、大門口、神社大ケヤキ
42	昭和四年六月廿七日	神ヶ谷、天嶽寺、天伊豆
43	昭和四年七月廿五日	武里、東福寺、四福寺
44	昭和四年十月十七日	久喜、神道、慈念院、戸賀
45	昭和四年十一月廿八日	大岩、天立、博覧館、北
46	昭和四年二月廿七日	清方、地区、聖徳寺
47	昭和四年三月廿六日	聖正院、林泉寺、勝林寺
48	昭和四年四月廿三日	平方、林西寺

② 研究会

研究会も今頃一月で第三十一回目に
なりました。

註 研究発表は最近 新年顔合わせ会や総会の折

に多くやっています。

主材も玄く、東武地区全体にまたがって越谷
の背景となる貴重なものが多く、特に東武地区
解明に裨さす 岩井茂氏を中心とするグループ
活動は学界にも及ぼす影響もある程で将来に期
待されます。

創立早々は従来の調査に基すく文献の整理の段階で
あったが、面を重ねるにしたがい新しい古文書の発見
で遂次その深さが顕われております。

反面 市史へんさん室の誕生は愈々 研究意欲をあ
ふりその熱意も研究物を通してみての賜物であります。

文化財への関心もたかまり、埼玉を埋解する上に役
立つて居ります。尚研究物は図書館に保管されて居り
ますが、精に必要と思われる所に寄贈されますが、
寄贈先では 図書目録にも登録され紹介されている様
です。特に本稿の初頭にのべた野口に礼氏の玉編な
どは埼玉の習俗をものした倉橋氏の原本(参考図書)
ともなうている所も着実な歩みが見えられた結果に外
ならないと存じます。

以下

研究会		回数	年月日	概 要
8	昭和四一年 一月八日	(イ) 全 体 の 研 究 成 果 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て 各 氏 の 研 究 成 果 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
7	十二月廿八日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
6	十月三〇日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
5	九月十一日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
4	七月廿五日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
3	六月廿七日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
2	五月十四日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		
1	昭和四〇年 四月廿四日	(イ) 大 野 会 長 の 演 説 を 集 め て 一 冊 に し て 刊 行 す る こ の 機 会 に あ つ て		

[illegible]

回数	年月日	概	要
18	昭和四三年 二月廿五日	発表者 本間理等 題 発表 堀井茂次氏 主 本村金沢林名寺文庫を 支 本村とし、越谷周辺の歴 史を語る	
19	五月廿八日	主催 越谷会 会場 本間理等の発表	
20	八月廿五日	発表者 三原善太郎氏 会場 下町タタリ屋の現 地ハミリ映写で鑑賞す。	
21	十二月廿日	座談会 参加者 越谷について。	
22	昭和四四年 五月廿五日	発表者 下町タタリ屋の踊子舞をビデオ で映写	
23	十一月一日	発表者 越谷三氏 会場 越谷の三氏 題目 越谷の三氏 題目 越谷の三氏	
24	昭和四五年 一月二五日	発表者 久伊豆祥社の例大祭をビデオ で映写	
25	昭和四五年 二月廿一日	発表者 河越市河越市理争 中心とした	
26	昭和四五年 五月廿三日	発表者 市内北川崎、川崎神社 の歴史をスライド	

研究集録

(其の一)

公報創刊号発行に当り、当報発刊の足跡
第巻号として野口仁礼氏の「年中行事」
倉林正次著(日本民族(埼玉)探検本
出典として貴重なもの。(昭和四・五の再版)

年中行事

理事

(野口仁礼氏発表
昭和四・五・八・廿三発表分)

次に記した年中行事は、春日部、越谷地方の主として農村地帯で、明治以前より伝習され、つい最近まで行われた民俗習慣である。而して戦後この地方も大きく変貌し、この土地に住む人々の生活が急激に變り、伝統ある古い習慣が次第にすたれて、現在残っているものはほんのわずかになってしまったようである。

月を追うて慰いつくまま記して見ることにした。

註「以下〇月の月は、いずれも月後れし」

一月

⑦ 正月・年神様を祭る。女の神様であるから男が年男として奉仕する。三日、快初をする。雅語を任つて快元、家中で食べる。

正月三日間を、三ヶ日、という。三ヶ日は早朝神社参拜をする。途中出会った近所の入道に新年の挨拶をする。子供達は着衣をまて小遣いを貰い、羽根つき、こままわしなどして遊ぶ。二日には書初めをして神にあげる。

史跡めぐりのあとから

昭和四五・三月

五霞村を巡って

会員 吉田 政一

「三月の史跡めぐり」と言っても一昨年の事であるが栗橋の「静女之墳」を訪れた後、其の東南に当る五霞村(元栗橋の古河田城址、隆昌寺、更に同村山王山の東喜寺を巡つての帰路、偶々下河辺氏一族のねむれる墓地を通りすぎた時のことである。

※

幾つかの墓石群にとり囲まれた塔型の墓石が一つ特に時代色の濃いのが印象的であつた。これこそ一族の祖たる下河辺行平の墳との事である。

とは云え、行平とは正史上の如何なる人物であるか、恥かし半らぬ身にする名であつた。考分室町時代の武将ではなかろうかと、その場はかく

② 大番、各家庭によつて田があつたが、一月上司に行く。親戚の者をまねいで新年会をやる行事である。普通の家では酒を四斗桶分にはんちくへ四分の一（種）を買つておく。

③ と草と日、曹作祈禱の日である。鳥追い行事の吸いである。正月と日を七草とも呼ぶ。朝七草粥を作り神に備え一家揃つてこれをたべる。（七草とは、セリ、なすな、五行、ひまわり、仏の座、すずな、すずしろ）普通七草は用いず、なすなだけ粥に入れる。農村では正月六日を女の年忌（女の正月）と云うところもある。神棚の前にまな板をおき、その上に七月をのせ、包丁の背で「なんなん七草なすな、唐土の鳥が田中の橋を渡らぬ中に、すつとんとんとん」と唱えながらたたく。これは古来の居る家庭で主にやられたと草までを松の内といつて門松はこの日に取りぬく。しの飾りやお供えの饅頭なども下げる。

④ 倉開き、一月十一日、くわ入れともいう。洗米少量に、するめをアキの方（才徳神）の畑に供えくわでうねを正る。田場所では苗代にするのとオサゴをあげ拜んだあとくわでうねる。

土蔵のある家では蔵の扉を開く。この行事は庄男がやる。農事開始の儀式の日であり、こうして曹作を祈り乍ら、新しい年の農耕を開始したのである。又、この日、田楽を遣つて神に供える。

⑤ 小正月

一月十四日から十六日を小正月と云う。正月十五日を中心三日間、正月中のおもな「もの日」である。奉公人が家へ帰る日、歳が奥家へ泊りに行く日とされている。此の日を数入りと云う。

開き流した。と云うのは、元禄橋成は、慶正年間に望月藩府に精突いた公方足利成氏が鎌倉から落ち延びて拠つた所であり、東昌寺は成氏の重臣兼由海助が主君のために建てたものとされる等、鬼も角五霞村は望月時代の際法からぬ土地柄だつたからである。

然し之は誤りであつた。後日下河辺行平とは平安朝末期、鎌倉初期、言わば歴史の大変動期に生きた人物であることを知つた。

下河辺氏は常陸の結城氏、下野国の山川氏等と互しく旁流流傳の姓を持つ下総の豪族で五霞村を含む下河辺注を支配していた。

注司行平は弟の四郎政義と共に頼朝の旗揚げにいち早く参加し、志田義玄鎮座、一の谷の戦い、奥州征伐などに功をたて、鎌倉幕府の有力な御家人となつた。

文治三年には大番役として千早常胤と共に義経失却後の京都にとつていな射手としての行平の技量は日本惣双の

⑥ けずりかじ

一月十四日には、「二ハトコの水（接骨水）」を切つて来て、その幹を十箇位に切り細かく縫に割つて花状とし、これを割つた竹の先にさし、柱神様や神棚に供える。松飾りのあと堆肥の上にも立てる所もある、家内の邪気を払い又福を招く印とした。又作の花と云つて福の豊作をも祈つた。

⑦ まゆ玉（メダマだん）ことも呼ぶ

十三日にエノ木の枝を切つて来て、十四日これにたくさんだんごをさす。大枝にさしたものは台所（土川）の米俵にしぼり付けて飾り、小枝にさしたものは神棚、仏壇に供え川松のあとなどへも立て近所へも配る。（互におくり合う）年のはしめの今こうして豊作を祈つておけば、きつとまゆや米が豊作になると信じていた。古い時代からの習俗と思われる。

注 春秋の養蚕は盛んでたいていの農家では、副業として

蚕を飼つていた。

⑧ 二十日こがし

二十日麦を炒つて石臼でひき粉にし、一升膳の（一ハリツトル）に入れ神に供えてこれを朝家のまわりにまいて歩く、或りは家沖で焼く。これを二十日こがしといい、ながむし、害虫などの退治の呪である。

⑨ 先霜の正月

正月十六日を地獄の釜の蓋もあく日といい、小豆飯を作つて佛に進ぜる。

手取りと頼朝から評價され、又頼家の弓の師範を託される程であつた。建久元年（一一九〇）頼朝上洛の際、後醍醐天皇の一人として随い、在洛中の晩参にも快奉している。

建久四年の富士の巻狩りには、頼朝の伏として鎌倉に在り、普賢兄弟夜討の事件の叛亂にも立合っている。

行平の行跡として漏してはならない物語りがある。屋島原の浦の平家討滅戦で華々しい軍振りを示され、義経の水軍にひきかえ、陸路山陽道と西下した頼朝の西海長征軍は悪戦苦闘した。鎌倉と結ぶ兵站線は長門の海を前にして極限伸度に見せ糧食途絶えて立往生する破目になった。その窮状は特に別当の和田義盛でさえ、腹が減つては軍は出果ぬと脱落の気配を見せた程であつた。

この危機の最中、自らの甲冑を売つて小舟を雇い最後の浪海の先陣をかく。出たのは外ならぬ下河辺行平、その人であつた。

⑩ あずきがゆ

正月十五日にあずきかゆを作る。このかゆの中に二ハトコの本で作ったかゆばし（先を十字にさいたもの）をさしこみ、このまま神にあげる。残りは家中でたべる。喰いて食べてはいけなうと云われている。餅などを入れることもある。

二月

⑪ 節分

立春の前日は節分である。節の分かれる時、即ち節がわり（節替り）。節分のコトを「トシゴシ」とも豆まきとも云う。豆をまいて鬼を追い払う。

年男が大豆を焙烙あぶりにのせて炒り、これを一升瓶に入れて神に供え、いわしの頭を五ツ、豆の釜にさし、炉で焼きたら、つばかけては「船の虫がまれるように、麦の虫がまれるように」と唱えながら焼き、これをヒイラキの枝と一緒に入口にさす。悪魔が入らぬようにとの呪である。

神だにあげた豆は、年神様からはじめて家の各要所妻所へ「稲は内、稲は内、鬼は外」と大声でさけびながら豆をまく。そして兩戸をしめる。残りの豆は家中でそろって年の数だけたべる。

豊凶のうらないに用いる。立春という新しい活躍の時季を前にして家の内外をまよめる。豆つぶてにより、或はいわしを焼く悪鬼、ヒイラギの針によって悪鬼を退散させ、害虫を駆除しようとしたものと思われる。

これをきいて頼朝は、一年の長征から帰った行平に対し、頼朝は養父として明石の守護殿を与えて、その所望を叶えたと言えられる。

頼朝の感状

富士の巻狩りの年、範頼は修善寺で横死した。

頼朝は建久十年正月に没しているが、その直前の十一月（建久九年十一月）行平に対し、永年の恩恵をねぎらう感状を与えている。行平は頼朝の愛子杉戸の清池に「阿婆羅山祖願寺」を建立、其菩提を用い供養したと言えられる。

※ ※ ※

頼朝の死後、鎌倉幕府の奥相北条氏の手中に移項する運命にあったが、この過程にあつて行平はどの様に対処したかはさだかではない。

行平が弓の術範として仕えた頼家は僅か三年にして將軍邸から下され、取ては非業の最後を遂げて修善寺の土と

② 八日節句

二月八日・十二月八日

二月八日・一ツ目玉の惡鬼が来るのを防ぐと云つて目饅(メカゴ) 普通ミケールと呼ぶ)を竹棒の先にかけて屋根へ立てかける。この日は出来るだけ音を立てないようにする。悪い日として恐れられた。ミケールは目が沢山あるので一ツ目の鬼も恐れをなして近づかないと逃げてしまうと考えたのであろう。又この頃、火災が多く発生するので夜番をやられた。

③ 初 午

はつうま・二月に入つてはじめての午の日、初午の日は、稲荷神社の祭りで青少年が神社に集り、一日中太鼓をたたいて祈る。おこもりという。

子供達は部落をまわり、灯明火を集めお祭りをする。この日はお茶をたえず針仕事も休む。風呂もたてない。これを犯すと大火にあろといわれた。甘酒を作つて参拝者にも分ける。

④ スミツカリ

初午にはスミツカリを作る。太根おろし(竹で作った筒形のおろし器)であらくおろしたものと、炒つた大豆を一箱に醤油で煮たもので、赤飯と一緒にわら苅に入れ、各神社などへ供える。

三 月

① ヒナ祭り

三月三日はヒナ祭りの日である。女の子の節句である。娘の成長

なつた。

舅の北条能房は、その前年北条氏によつて亡ばされていた。頼家の補佐役を頼朝から委託された「畠山重盛」も頼朝横死の翌年(一二九五)北条氏によつて滅されたが、その途中の中に下河辺行平の弟が見えたのである。かつて頼朝在世の頃、梶原景時のごんげんによつて重盛に謀反の疑がかけられた時行平は母の友として重盛を頼朝の面前に伴い、潔白の証を立てさせたのであつたがその景時も己に殺されていた。重盛を討たなければ、自らもまた、北條氏のため殺されると云う切羽詰つた行平の苦衷が偲はれる。ともあれ、畠山事件を最後として証人の舞台から姿を消したようである。 以上

附記「最後に岩井氏に感謝の意を表す 史跡めぐりの後帰つて大育科(今学館)にも悪いが岩波新書「源頼朝や武家の「下河辺」に下河辺行平の弟を捜し当てた。在司行平の詳しいのは岩井氏氏の春日部氏の研究とその附近の動向だった。

を祝う行事である。前年四月から三月迄の間に其の子の生まれた家へ親戚友人近所の人々がヒナを買つて贈る。このヒナをヒナ籠に飾り草餅菱型餅、白酒、桃の花等を供える。嫁は節句祝と喜つて家々へ泊りに行く。ヒナはだいいり様(男)、官女、五人囃子、隨身、衛士等をこれに重箱たんとす。長柄、鏡台、お針箱等の調度品などの飾り、このヒナは大に保存しておいて毎年出して飾る。

② 彼岸

三月廿一日(二十日)を中心に前後一週間を彼岸と云い。二十一日を彼岸の中日という。餅を祭り(先祖)墓参りをする。親戚の者も墓参り来る。

四月

八日 節句、四月八日を八日節句といい、甘茶を御馳走になりお釈迦様にもかける。

五月

① 端午の節句

五月五日菖蒲の節句とも云う。男の子の祝日、鯉幟り、吹流し等を庭に立て、家の中には五月入来(武者)座敷囃子等を建て飾って祝う。是等の飾物は男子出生の時親元は知己から贈られる。柏餅を造り置板には菖蒲と蓬をさす。菖蒲湯をたてて入浴する。これは悪疫を退かせ悪病に掛らない様にするものと思われる。又此の頃には男子は、風を揚げる。大川黒敷の風が五月の空にうなりを立て、霧の様に、鼓

正史に学ぶことの

大切さを思う

会 員 宮 腰 清 雄

数年前に中央公論に発表された「ルクレツィア・ボルジア」の一篇から異常な感銘を受けた。ボルジア一家と云えばルネサンス期に悪名高き家族、中でもルクレツィアは美人であると共に非情な女として伝えられていた。

而し、ここに描かれた女性は大法王アレクサンデル六世、兄チエーザレの野望の犠牲となつて故妻の結紮を余儀なくさせられた不幸な女として同情の眼で描き、彼女の周囲の當時のイタリヤの情勢を達意な名文で描いている。

昨年「チエーザレ、ボルジア或は優雅なる冷酷」と題する著者の刊行を知り、各書店で探したが現当らず、店頭に紙がても「ア・ソ・ラ」にありませんかとの取事。思いで乍ら不満を云えば近頃の書店の不勉強根りは甚だしい。

に壯観である。

② さなぶり

田植終了の晩手伝つてくれた人や衆人が集まつて「さなぶり」と云う行事をやる。流つた苗を度申様へ供え酒肴を供し、後入りが飯食する。田植終了を祝ひ祈願する行事である。

③ 大 抜 い

五月三十日 氏子家が神社に集合して大抜いをする。悪疫流行の季節となるので足を抜く行事である。

六 月

① 百方湯 六月二十日頃 家内安全 悪疫退散を祈る行事である。

(行事の大要)

直經四、五米程の荒縄をより合せて通つた大きな数珠を町内し、氏神の前でお抜いをする。檉一束のこのく三〇人の青年が四神酒を載せ、数珠の数珠につかまり、近頃を先頭に「ナイダナイダ」の掛け声も勇ましく駆け足で部落の各戸を廻わり、トブグチ(入口)から土足のまは産敷へ抜けて庭へ飛び下りる。鮮天を結た白絹人(禊祓衆)と呼ばれる元老連は其の後から緩つくりとついて行く。

各家では当日、鹽の上に延を布いて戸障子をはずして通りぬけられるように準備し、庭先に縁台を出し、アラレ、米炒り、菓子、赤飯、酒(家によって異なる)等を用意しておく。産敷から飛び下りた百方過は林み正らその馳走を食べ、ついて来た大男の子供達に分給する。子供等は手に手に旗を掲げて其の中へ入れて遊ぶ。こうして部落の全戸

公告、書評で感嘆をそそられて行くつても細からサット取出してくれぬ店はない。越谷市内の書店などは何が置いてあるやらも存じなく、その辺にありません、り位の返事であり、すべて灰次店に任せれば飯が食えるとは結構なご縁だと思ふ。

因循林園「チエーザレ、ボルシヤ」を著し、求め得る通訳した処、期待に反せぬ好著、ボルシヤ一家を中心としてのルネサンス期のイタリヤ情勢を説き明し余す恐くない。

当所のイタリヤ半島の三太勢力、ツエネツイア共和国、ミラー後国、ナポリ王國の國に位置する法王領、其の他大川の諸侯領、これらがその時々の利害に依りて合従連衡して保身の策に凝心し又イタリヤ征服後に燃えるフランス王、スマイン王と結んでこれらの軍隊を引入れるなど、権謀術策の限りを尽すような様子を諸種の資料から説いてゐる。父ロドリ、ゴガアレツサンドル

を廻わり、終つた青草産は教珠を村境の東庚申道の辺りへ送つて行事は終了する。悪疫流行の際は臨時にこの行事をやつたところである。

② 虫 追 い

六月中旬頃、害虫を追ひ、農作を祈る行事である。

行事のやり方（地方に依つて多少の相違はある）一戸一人（外に子）は出動する。長さ三米、直径二〇センチ五〇位の藁わらを造つた松明を持つて氏神様に集つた入々は、お赦いを受けた後、御神火で松明に火を受け、次々に出発。鉦を叩き、これを先頭に、田圃道をホーイホーイと囃え乍ら、追つて行く。一まわりすると一ヶ所に焼え残りの松明を集めてもやし、行事は終了する。

七 月

① 初 山 七月一日にまんじゅうを作り、赤坊を背負つて母親が山登り（浅間様）をする。これを初山をさせるという。うちわ、菓子おれ等を貰つて来て近所へ配り、子供の成長を祈り仕事を休む。

新神のある家では、この頃から軒へ提灯を下げる。

② と 夕

七月は七夕である。六日 色紙で短冊を造り、蓮の葉に溜つた水を集め星を簪り「七夕の天の川」などと書いて竹に結び立てる。又直帯で馬を造り立て長竹の下に向い合うようにくくり付けて供える。山表まんじゅうや野菜などを供える。（彦星と姫星とが一年一度逢う瀬を禁しむ機会でもある）と考えられる。この日は仕事を休む。七夕の竹は川へ流し、馬は産根へ上げる。

式世としてローマ法王の位に即き、チエーブレが権枢卿に選任されたのはまだ学生の身である十七才のとき、これから三才の若さで殺される運の短い期間にイタリア統一の希望にもえ、渾身の力を尽くし、妹ルクレツィアの夫と暗殺するなど、後世ルネサンス期のメフィストフェレスと評されたわけだった。

然し著者は簡單に善玉、惡玉と別切らずイタリア統一を志向するチエーブレの風貌、智謀にはむしろ讃嘆の眼を向けてゐる。

この二書を読んで痛感したのは、全吉界とイタリア半島との地域の大いなる差にあり、今日の世界情勢とよく似てゐることである。

神聖ローマ皇帝を兼ねるスペイン王腓力二世が蓄えたフランス王、東方貿易の利で莫大な財力を有するヴェネチア共和国、俗界に強力な発言力をもつローマ法王、これらの大勢力が、その鉅くなき野望を遂げんとして熾々の衝

③ おぼん

十三日、十六日をおぼんと云う。祖先の霊を祭る日である。お互に盆参りに行き、「お静かなお盆でおめでとうございます」という挨拶をする。

八月

① 八朔の節供、八月一日は八朔の節供で仕事を休む。川麦、饅頭等を造つて食べ、神社に参拝をする。

② 十五夜

旧曆八月十五日 十五夜様へは、すすき、と草、秋の果実などを供える。(桔梗、苺、女面花、萩(朝露) 蔦、桐子、葛) 朝顔は桔梗とかわる所もある

③ 彼岸 春の彼岸と同じ行事をやる(喜す。)

九月

くんちのこもり、九月八日の晩、若者が氏神様へ集まり、初午と同じように、くんちのお祭りをする。これをおこもりと云う。太鼓を叩き一晩中騒ぐ、九日の朝部落の人々は赤飯、にしめなどを氏神様に供え、そのおさがりを若者がいただく。

十月

① 神送り、神迎。十月は神無月、神々は出雲に出張して滞在されると云う。出雲は九月三十日、霜降は十月三十日と云う。この日お

祭を催し、最終は戦争に訴えて己の望を述べる。

当時の軍隊は主力が、各国民から召る傭兵であり、都市攻略の後数日間には当然のこととして慰養が許されており、資産家は財産を他に疎開させたが、民衆の受けた被害、苦痛は如何許りであったろうか。

私などは少年時から、事実は小説よりも奇なりと云う歌で、歴史が面白いから讀んだだけであり、別段研究するといったこともなく、古い事を知り度いから史書を讀んでいるに過ぎない。しかし乍らこの二書は著者が意図するが否かは知らないが、当時の時代像を括いてへの反省、更に一般に學ぶことの重要性を強調しているが如く思われる。

二度と戦争の惨害、愚かさを繰り返すまいと才一次大戦後、國際軍盟を作ったが、や現況維持、やや打破を叫ぶ為政者の手で機能を受けない、才二次大戦を起し、恒久平和を唱えて國際

炊明やだんご、御飯を供えてオカマ様を祭る。

註 おいさま様は、出雲の神さま。

② とうかんや

十月十日をとうかんやという。ぼたもちを造り、取入れた稻穂の上に供える。子供達は新藁へ草がらなどを入れ、縄でまいて、わら鉄砲を作り「とうかんやのわら鉄砲、オーレの鉄砲にまける」と大声で喝え乍ら廣や街道などを叩いて歩く、余りの騒ぎに、もぐらが逃げてしまふだろうと云う。

別名 もぐら追いとも云う。ねずみ、へび、いたち等の害からのがれる一種の呪であらう。

③ 地蔵様

十月二十三日は地蔵様の縁日である。

十一月

① 廿一日は大師講の日である。大師様は危をおとしてまゐると云うので小豆かゆを造ってあげる。

② 冬至

この日には、こんにやくの料理をやる。又ゆず湯に入ると、病気がくらないと云われる。

十二月

① 出かわり、十五日は「雇入（奉公人）」と云った。の出かわりの日である。一年間雇われた奉公人は十五日実家に帰り、新に雇われた者

運命を繋いだが、これも各国の野心家の非協力でその機能を廢棄させられておる。

世の権力者となつた者は、その権力を奪われまいとして種々の策を弄する。時には戦争にも訴えて、他国への敵愾心を煽つて権勢の振興に努めるのは、権力を有することが如何に樂しく堪しいのかと言いたい。

尤も昔の権力者は、他にその力を奪われまいとし、若し奪われれば一命を失ふないかぬから、保身には一生懸命であつたろうが、今日の如く所謂民主主義政治の代では殺されることもあるまい。

むしろ政權の座を失つても法王時な存在として蔑みながら權威を保つておる人もある今日だ。

私共は

尸位から降り、今直に数限りなく繰返して示した惡かな所業を、もうこれ以上行わぬよう、為政者の為すことを監視すべきであると思ふ。

が二十三日にやど入りをする。これを出かわりという。

② 夜はん

火災の季節となるので、この頃から夜はん（夜警）をはじめ、交番制で二人一組で一人が提灯一人は拍子木をもつて、地区内をたいてまわる。

③ 大掃除

正月を迎える準備として大掃除をやむ。（すすはらいと云つて下司頭である。）

④ 餅つき（二十八日頃）

各家では餅つきをやる。年神様や他の神々に供え鏡餅をもつくる

⑤ 年神様の柵作り

門松立て、正月の準備

正月を迎える準備として、年神様の柵作り、餅りつけ、供物などを供える。一夜かざりは、いけないと云われている。

主な行事 習俗其の他

衛生に関する知識に乏しく、医療行政の整わなかった時代には病氣に対していろいろ迷信が多く、呪とか、祈禱とかが広く行われた。医師の数も少なく、医療費も高くそのため一般庶民は餘程の重病人でなければ医師にかかるとはしなかった。

だから医師の治療を受ければ全治すると思われる病入も医療費の支出を恐れて手おくれとなり、死んでいく者が多かった。

付記

著者は通算七生、昭和十二年生まれの女性で、イタリアに学んだ学究である。

ルネサンスの女たち

中央公論社

チエーザレ・ボルシア

あるいは「優雅なる冷感」

新河社

研究餘滴

理事 三原善太郎

昭和四十一年度からこの会に籍を置き、何くれとなく皆さまのお古語になり、特に研究主題が、何時とはなしに県指定文化財「下田久里の獅子舞」となりました関係と下田久里地区の皆様は非常に非常にお世話になりましたことを紙をかりて御礼申し上げたいと思ひます。

「狐送り」は、そのよい一例である

① 狐おくり (狐の追し出し)

長く病床に付いている病人(肺結核、慢性胃腸病など)を狐つきと言つて、狐に憑かれた者と家人も信じ中入もそお思ひ込み奇妙な行動をするようになる。このような時、家人や近隣が集まり「狐おくり」の行事をする。その方法はいろいろの様式があるが、普通先達が中座という相棒を立て目かくしをさせ、幣束を持たせて座らせ、おもむろに呪文を唱え、中座のもつ幣束が自然に動き出す。狐が中座に乗り移つたのである。先達が魂を預計らつて、あなたは何故この家に来たか、どうすれば出て行つてくれるかと、色々問題をやる。最後に狐が要求する卵玉筒、油桶三枚、豆腐一個などを表の蓋(さんだわら)と云うにのせ狐坐りをする。

狐は(中座)ピョンピョンはねながら、窮道の止まて送られ持参した供物を頂戴して退散する。中座ははじめて正気にもどる。しかし、こうして折角の狐おくりも余り効果はなかったようである。このほか狐に憑かれた病人を唐草などで癒す方法なども行なわれた。

② 夜盲症

生活程度が低く食生活の研究などあまりなされなかった時代には栄養失調に陥入る者が、農民の下層階級に多かった。山作人と呼ばれる農家の朝食は麦七、米三の割合の麦めしが多く(割割飯という)副食物は自家で生産した澱粉粉漬のもの菜漬、沢庵漬などで、魚肉等は殆んど取らなかつた為にも過労の過労夜盲症で夜盲症に苦しむ者が多い。

県指定文化財としての獅子舞

○ この下面久里に選つて東武地区の中心となつてゐる理由とその正統性について

○ 村落発達段階と伝承との関係・特に秘巻と迷信にまで昇じた理由

○ 曲目に残つた増減形式と伝統の分散(住民適合主義への転換)

○ 保存と価値・後継者育成問題

以上の各項について餘滴として考察を加える必要が生じて来ました。次に、この研究から采る目的の幾%、どんな問題が解明されたか。又何が未解決のまゝであるか、と云う問題にふれておきたいと思う。

一、荒井太夫説の(伝承)中の

- (1) 神社とは関係はないと云う点
- (2) 凡そ三百五〇年前と伝う点
- (3) 京都紫宸殿よりの伝承説
- (4) 途中の松崎氏の伝承とする点

③ まひきと隋胎

長塚節の小説「土」にも見られるように明治兩代（下層階級の農家）
 小作人と言つても自分の田地を全無もたず、全部借りて耕作して
 いる農家、水呑百姓では子供の多く生まれる事を極度に恐れた。その
 結果まひきや隋胎が半ば公然と行われた。願まれば他人のものも引
 受ける者も居た様である。然し、衛生的知識に乏しい、ほんの素人の
 やる事なので、このため命をなくす者もあつた。

④ 小作人の生活

働けど働けど我が暮らし余にはならず、労多くして酬いられることの
 極めて少なかつた小作人の生活は誠にみじめなものであつた。五反と
 か八反とかの田地畑畑を地主から借りて、それを耕作して生活する者
 であるが、その借料（入附）は、田の場合は一反につき高いものに
 一石二斗（三俵）又はそれ以上で、手許に残るものは僅作で二俵
 不作の時は一俵そこそこである。それでも小作人は耕作地の取り上げ
 られる事を恐れて、年貢米を納めた。子供が學令に達しても就學させ
 ず奉公に出してしまう親も多かった。

年給七、八両であるがそれでも食が減るので（口へらし）親は助か
 り、けいあん（莊龜）と云う奉公人の周旋業者が買けて、こうした奉
 公人の周旋をした。當時自作農家では男女三、四人の奉公人を雇入れ
 て耕作した。どここの家にも馬小屋があつて農耕用の馬が飼われた。

奉公人の年給は一人前の男で四十両前後、女で三十両内外、外に仕
 着せと云つて夏冬の衣類、はきもの、もの目には小使が支給された
 一年間主家でのびて十二月十五日亥刻に帰る、廿三日やど入りと云つて

二 其の他 余論として

- (1) 下河久重の部落形成段階
- (2) 香取神社の縁起が出来た。
- (3) 部落有 神社祭祀當番記録の価
値と保存
- (4) 銚下舞双笛兵衛としての由果

三 未解決の問題と追録研究題

- (1) 秘巻の未公開
- (2) 保存と秘巻者の買収

四 新しい研究のための再出発

- (1) 武蔵国の正統系譜の二系統
- (2) 藤本坊常慶
- (3) 横瀬信濃守

（由良家）上杉家時代を去り
 小田原北条へ変つた時の政体

- (2) 時代の推移で地系統の流入
- (3) 正統派継承と雖、部分付允許を
なされたもの

(4) 時代と土地の住民の要請で習俗
に入り創められたもの。

五 現住埼玉県の民族芸術史では、
 更張型式からの幾型分枝である

雇入の新旧交替するのを仕出かわりと云った。

奉公人は農作業に従事するは勿論であるが、農閑期には男は米、麦つき、縄ない、薪づくり、木の根堀り、女は朝晩の炊事、はたおり、養蚕の手伝い等、年間殆んど休む事はなかつた。

⑤ 米・麦つき

二斗米のはいる白を「二斗ばり白」と云つて、これで米をつく事が普通行われた。白に米を入れ丸く造った輪三洞ばかりを奥中に入れてその輪の中を井でまわり回す。一日一俵が一人前とされた。麦つきも奉公人の仕事で、これは七月八月の暑い時期にやる。朝四時頃起き出して畑がらという道具を使って足で体重を利用して麦をつくのであるが、午前中には一人前の麦をつき上げ午後は休む。

⑥ 夜なべ

秋から冬にかけて夜が長くなると「夜なべ」と云う作業をする。秋の取入れ時は昼は田で働き、夜は夜なべをする。秋は稻こま（これはかなこま又はセンバ）と云う道具を使う。

からすがきなどおし、冬は寒い台所の板の目で男は縄ない、依頼み、女は綿くり、ざくり返し一個・薄暗い所で皆おそく追働くのである。

⑦ はたおり

農閑期に女は約はた織りをする。盛里には前でも後でも隣の家でも機械はたと言つて足でふんで、かや、ガリ、ゼなどを傷織する。その音が交錯して活気があつた。一日織つて五十銭位になる。糸は少しずつ残すようにし、これで自家用の衣類を織つた。農家ではたいいてい綿を

一 東武地区の中心となる問題

過去五ヶ年間断絶的ではあるが、下田久里の獅子舞を観察し究明の端を切つたが、世に氏の伝統として秘伝は未公開のまま、結論は出せない。迷信と盲信は将来の信憑性、と価値の上から何程のプラスとマイナスとの比重が生ずるか。私の出逢つた問題の中、ここだけである。秘伝を公開しても取はつづれない。只庸人に見える人の精神的調整のみである。

結論は出せないが、ここまでは言える。この限界点以内に情況を判断する。

獅子舞観察への大縁でさえも現在の姿を中心に分類をす、ゆゑ、発生源をも追究されて居ない。NHKの解説も文化財保護委員の某氏も崎玉県民俗芸能研究家各位も今一ツ契機込んで貰いたいと願う一人である。

作つて衣類は自給自足した。採集した綿はくり台で種子を除き、綿屋を頼んで綿打ちをする。打ち上った綿は棒状に巻き紡いで糸にし、蒸めて織物を作る。この仕事は農家の暇の重要なものの一つでもあった。

⑧ くでぶら（経水真田あみ）

当時経水真田あみが盛に行われ、凶作水害の災を是に依つて補填しようとした。学校でも休み時間にくでぶらを奨励した。

⑨ 夜ばん

小作農だけでは到底生活する事が出来なかった。下層階級の農民は子供達を季公に出したり、自分は土水事業の賃取りなどに出て辛じて生活している状態であった。だから當時は生活に窮する余り、こそころへ怪犯罪が多くなり、これを防ぐため夜ばんと云う自警の方法が講ぜられた。田圃の四辻などに竹で四角型の小屋を造り、わらで屋根を葺き、二、三人が寝られる位の居間を作り、夜具を持ち込んで時間を定め、地味内を巡警する。

⑩ 兵隊おくり

毎年定期的に小學校で徴兵検査があった。甲種合格で入營が決定すると、一ヶ月も前から祝入營（親戚や近所から贈られる）のほり旗を立てて入營を祝し、入營当日は盛んな飲送宴を開き兵隊おくりをした。

⑪ 機動演習

夏の芽が五、六頃に伸びる頃になると、よく軍隊が演習にやつて来る。小銃や大砲の音に大入の気は浮き立ち、仕事を棄てて後を追つて見物の為、河堤までもついで行く者も多かった。却路へ民宿する時

獅子舞を考察する限り最少限次の諸条件を根本的に究明すべきであろう。

一 獅子舞の始まりは「日本神話」

の天の岩戸に由來し天照太神をお迎えする情況の舞に型とられた事で、純日本的神話思想を背景に発生している。文献上では

所管も伊勢内宮に置かれた。

後に伊勢外宮に置かれていた。

（律令國家の官制で宮内少輔に）地方では大體、神部の二省の中におく御機として弘教全盛時代吉束の神道教団を迎える一ツの文藝の形像化である。

二 具象化の背景的思想は弘教上位

神は弘の具現者と見做され、獅子舞の舞は人間に最も親まれる動物界の代表とみなされたところに、獅子舞が生まれた。

三 外来獅子（弘教思想の中経由）

ライオン型は始めにはない。殆どあり本末脈で中国人の最も親まれ

などは一家を挙げて散居した。時々氣球などがおりて大騒ぎをするこ
ともあった。

⑫ 卵買い

農家では副業に何家の家でも雞を飼った。大てい小數羽飼いで多く
ても十數羽で放し飼いで、夜はとやと云つて合所の鶏につるした大きな
鳥箱へはわをまいた一本梯子をつたつて入る。卵もその中へ生む。一
週間に一度位の制でかごをかついた。卵買いが来て買つていく。取引
は普通何料と云うのが基準である。雞鳥と古雞の交換もする。

⑬ まゆ売り

一般農家では養蚕も盛に行われた。桑の周旋をする者も多かった。
取ったまゆは車にのせるか、担いで町へ売りに行くのが臨時商賣所が
到る處に出来て、客(まゆ売)を呼びこむ風景が随所に見られ活気を
呈した。

⑭ 集団乞食「すみおぐろ」と云う集団乞食が時々農家をまわった。

吉や神社などを根拠に十人から十五人が集団を作り(親分が居て執率
する)頭数に依つて金目を要求する。この時代には普通乞食も多く毎
日一入二人はまわつて来た。この外ゴゼノボ(舊女)という齒目の老
婆が子供を手引にして三味線をひいて家々をまわり、ヨカヨカ館屋と
云つて館台を頭にのせて太鼓を叩いて館を売り歩く行商藝人が居た。
頼まれれば簡簡な演藝位はやった。其の他獅子舞、万才、猿まわし、寅
なおし、いかけ屋、石臼の目立て、唐臼造り、かなごき売りなどが農
家を訪れた。

⑮ 花火見物

る動物の代表である。漢字の家と云
う文字が、家に屋根をかけた。ある
それがライオンに置き換えられのは
日本の武士の兴起に由来する。ライ
オンは百獣の王、強さにつながるの
で平安の後期、源平時代の反映と見
られる。

四 神仏習合思想と武士の意識で表
現型式が變った。中国思想は更に一
つの表現型式を採り出した。それは
龍(瑞兆を表わす)同様に民衆接近
への方便が採られた。

五 絶対至上とされる信仰(神仏)
に天台法印と真言宗(東密)が、の
行軍型式を採り、その信者行着が主
役をなすに至り全国波及の端を甫く

六 鎌倉時代の初期 頼朝は行政策
に活用した。悉く言えば戦争の無情
愚は入道生活に遁世する考え方と住
民の直轄策に治略を窺見せんと力め
それが藉じて情報網的役割に委じた

興祭の少なかつた当時は寺や神社での祭りは祝行事が多くやられ露天
商人、みせ物川運などがたち、花火が打ち上げられる事が多かった。
子供等は落ちて来る落下傘やおしどりなどを獲って拾った。三大節等
にもままつて花火が打ち上げられ、一家こぞって花火見物をした。

⑯ 正月もちい

(正月とは休日のことである) 節雨があつたり、部落におめで度い事
などがあると、行事当番が目耶さま(部落の長)に正月もちいに行き
布令を出して(午後)半日休日とする。定休の制度など無かつた当時は、
もの日(盆、正月、鎮守の祭など)の外、休日はなかつた。

⑰ 祝儀・不祝儀

中流以上の農家の冠婚葬祭は大へん念入りに行われた。当時根三人
しんしようがつづれる」と言われる程金をかけた。葬儀もその通りで
部落の人が多数集つて来て、三日間位、昼夜の別なく接待する。

⑱ こやしとり (下肥)

麦の肥料にこやし取りがやられた。庄道十ミ、四軒もある砂利道を
蒲生までこやしとりにいく。荷車に四斗樽四本をのせ、早朝に出て夕
刻帰る。これは主に費用とりと云う雇人の仕事である。重箱一杯の米
当を作つてもらい、日給五十文位になる。

⑲ もらい風旨

風旨種も賣う余力の悪い下層階級では隣近所へもらい風旨に出た。
寒秋は行水ですが、寒い間はよくもらい風旨に出た。

⑳ 魚とり

鰯など使用されなかつた当時は鰯漁が多かつた。霜柱の肥料は、

その例は義経追討の奥山伏(修験道
を放つてゐる。山伏として(通称六
部衆を賣うて六十六回遊)その縁
起書に明示されている密令であり又
便命と化している。(岩田家文書)

室町時代の文治政策と大塚化(神仏
行事と住民の縁祭と接近し、町衆、
衆衆、おかげ、ヒョットコ等が聯合
を活用し、民衆の雨乞、病氣払い、
政は五穀豊穡、天下太平の祈願など
が主役をなして来た。

○ 戦国時代は別段豊化なく系統保
持のみである。

○ 徳川時代の天下は只一ツ、それ
で天下の名流は集じられた。とし
て五代以後は室町時代の復活と民衆
への浸透が地方行事と共に愈々多彩
な形式が生まれた。

○ 明治初年の神仏分離は仏教から
海を消し伝承のみに止まり、神社へ
移項されて今日に引継がれたのであ

糶給へばしか、大豆油などが主であつたので、魚類特にどじょうがよく夕立後の田圃では丸々と太つたどじょうが沢山とり易く農家の蛋白源となつた。又排水のよくないたんぼには至る処に塩田があつた冬になると之を汲みほしてなます、餅餌などをとる。

② 朝草刈り

農家では農耕のため中流以上の家畜では牛馬を飼つた。その飼料にするため早朝草刈りをした。朝露の一粒おりた田ん圃道に草を刈る人々があつた。朝に起めて牛馬一日の飼料にして糞肥の材料とした。

昭和四五年八月廿三日

地蔵菩薩について

その一

会員 佐々木 資 郎

九月（昭和四五年）の史跡めぐりに「野郎の地蔵尊（青洞深澤山寺）」に詣で、耳一度の御用帳の寺刻に拘らず御住僧の特別なるご好意に依つて特に開帳、安置された最上級の須弥壇に登り、親しく奉拝させて戴いた事を厚く御礼申し上げる次第である。

さて地蔵尊については既にその信仰の意味を知られている方々も有るとは思ふが、中には未知の方々も有る事と思われるので、私なりの解釈を、披露申し上げたいと思ふ。

る。只、昭和二十年以後、右領軍政所に依り、神社宗教禁止と共に神社と切り離し、形式は踏襲されても神社とは無縁に民俗芸能として再登場したのが夏柱の獅子舞である。

武蔵面に正統派が二ツある。

一、武蔵の柱人 横瀬宿濃守の流

二、上野の柱人 大蔵三郎一三代目

同四代目上野の柱人藤本坊常慶を経て系統で常陸国柱人 伊藤仙藏なる人に伝えられている。

下回久里の獅子舞はこの各項に照して何れを探るべきか、常二の姿足を暗示している。最終結論は新井家に還ると確信するが研究の段階として、世の吟味も必要かと思ふ。

条件の吟味

上州藤本坊常慶と面迎

(1) 常慶と藤本坊……修験者法印

地藏菩薩の信仰は大体、六百五十年位前から、民間において信仰し出したのは、五百七十八十年前あたりと思はれる。

最近では第六天とか、庚申嶽を造ることは非常に少なくなっているが、地藏菩薩は何か災害が發生し、奇重な人生を失ったとか、その他同情を呼ぶ死を招いた場合などに、その靈を呼び、地藏菩薩の慈悲心を以て救つて救くという信仰心から発せられているものか、とても多い様である。

地藏菩薩のあの慈悲心に満ちたお顔、お姿で東遊されたのは三百五十六十年位前からであると言われてゐる。へ私が今迄色々調べて見たものは、寛永六年（一六二九）が一冊古いものであった。

地藏菩薩の救済

地藏菩薩の救済は、大地の如き廣大無辺の恵みと、尽まざる衆の如き財宝をもつて、一切衆生を済度すると云うもので、地藏菩薩は三ツの誓願を立てられた。

その第一の誓願は、衆生の迷いを救済出来る迄は、自分は菩薩の位は受けぬと云う強い誓願を持うた。

その第二は、苦しむ者の身代りとなつて、これを助けるという念願。

その第三は、釈尊が入滅後は、この世の中は「無佛界」となるので、釈尊に代る佛（弥勒菩薩・布袋の化身）が出現して光明世界となる迄は無佛界の救済に努力するという誓願であつた。

この世に六道と云つて（天上・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄）など

(2) 後に羽入 藤本坊

所置 古河公方家唯一世家の配不羽入は幸寺城主時代の有力な坊。羽入・不動岡・大相模の要点を結ぶ旧荒川古利根川氾濫にある道場配置に在る。

(3) 一世家一族にして家名恥か、の新井家が中核となる。そして新井家として羽入・幸寺・不動岡との現当該地区に在る獅子舞の太夫として今尚存する。單なる偶然とは思われぬ。

○ 猿蓑殿を優利に導くために、京極へ直結する家柄は古河公方・一世家、新井家の同族家臣関係ならば最も近くなるが、三五四年前説は幕時代のズレが出るが、最終新井家の大阪冬の陣の年輪を境とすれば散えて不思議はない。こゝで歸深助が精養軒武士を兼て定着しているから、家柄と伝承への権威のためにはあり得る事である。

何処へでも行って、そこで迷い悩める者を救済する六地蔵と云う分身がある。(これは何処でもよく見受ける六体の地蔵尊がある。)

元來親み易い教義であり、お婆なので大衆受けがして、色々な伝説等も作られ、自由に形づくられた。

延命地蔵、子言地蔵、身代り地蔵、危除け地蔵、壽命地蔵、靈昌地蔵、兩乞地蔵、彌陀地蔵と云う色々な地蔵尊が生まれ、信仰されるようになったものである。尚地蔵菩薩は各人の精神の表われでもあり、これに対する相手側の気持や顔の表われでもあると言われ、善惡を判断する幽界の裁判官である。閻魔大王の表裏の半身であるとも言われている。

「宿りる時の地蔵尊、返す時の閻魔尊」なんて言う言葉があるが、よく考えて見ると大衆味のある面白い言葉ではないだろうか。

お互も、のど元過ぐれば熱さ忘れるの精神は持ちたくない者だと思ふ。

六道の私考

天上に財産は有り、名譽もあり、子望にも恵まれ何一つ不足のない身分ではあるが、何か心の底に割り切れぬ不安がある。

人間に人間である以上は、少しでも人間らしい良い行いをして、凡ての悩みより脱却して行く事こそ神仏に近づく道であるのに「自分は何一つ悪いことはしていない、神様や仏様と同じ行為をしているのだ」という、うのぼれの気持ち、然し又、夫越その他の動物のまねは尚更、猿猴であるが、ややもするとこんな行為に陥入り易いのが、人間の常である。

結果として下間久里郡路に遺るものは次の通りである。

一、神社とは関係はない、伝説は

① 元禄六年七月廿七日追は関係が無いと解釈しても良いがそれ以後は大いに関係ありと見る。根拠……武蔵国西新方領

下間久里村荻井平次衛

より下総国庄内郡清水村の若岩八幡大菩薩と武蔵国西新方領の下間久里村香取大明神へ同日付「獅子佐々羅之口伝書」志々切紙之事の同日時て文書が出ていゝ。

二、香取大明神の縁起(要)

① 初詣 天禄三年甲午歳

② 創建和祭 慶長元年丙申

宿元当番 徳右衛門三郎兵衛

作右衛門：先祖深野家新井家

松崎家と見られる。

③ 社殿再建又は修理

宝永五年戊子十月 藤崎達

会田伊右衛門、江戸三河屋

修羅Ⅱ 一寸した事でも腹をたて、又つまらぬ事に勝ち誇り、英雄気取りになるその心

餓鬼Ⅱ 他人にねたみを持ち、何でも見る物、人の持つてゐるものが欲くなり、自己の無努力にも拘らず、そのまねをしたがる心で、随つて何時も満ち足りぬ不満を持つ精神

畜生Ⅱ 弱い者を見たらこれをあざむき、賭みにどりても押しやっても己の利のためには、手段を選ばず、満腹になろうとする心
地獄Ⅱ 何事にも素直になれず、人の反対に出て自ら己を苦しめているところ

これをいましめ、お救い下さるのが六地獄の分担した恵みの證でも此の迷い、悩みがあると認う。これは、現世に於ける衆生の姿であるが幽界に在る近親其の他の靈も、生前の罪禍に苦しみを抱くならむと、その救を請い願う心持からの信仰も、現世利益と共に生まれているものである。

補 考

へんしゆう室の栄

ス これは私の走え方であつて、仏典に依つていないことを承知していただきたい。

ふ 本稿は 時季第一巻、昭和四五年十月十一日に初版
昭和四六年一月廿四日 再版されなく読まれている。

ふ 研究その二 急務を四巻として昭和四七年二月廿と
日初版 創刊号発行に当り貴重資料として再録す
地名考「富代町百間の精原」 一編集子一

④ 再建文化十三年丙子年

(イ) 現社屋 昭和四十六年改築す、

この内容を吟味すると創立から室永の改築迄一〇九年、文化の再建迄一〇八年、今次改築迄一五十年目となり、その間合計三七六年となる。一回の火災による記録は見当らないが更に慶賀に堪えない。只その中間に補修工事などがあると思われる。

第三 下総国川辺領庄和村中野へ弟弟子として獅子舞を授けた文書には太夫松崎平右衛門の名が見えるが、二ツの巻綴を持つと消えられる。即ち代々数代太夫の名で行われた允許にこの時へ享保五年の分松崎平右衛門となつたのか、荒井家との相関性は残るが、文書そのまゝ受取つて調査した結果、現当主松崎剛次郎氏の宅の先祖であることが寺の圖去帳で當家の墓石と位牌と照合して四十年に解明せられ、松崎平右衛門、戒名瑞空覺源居士で與より二番目に在る。

地名考

研究その二

百間の話

南埼玉郡宮代町

佐々木 資 郎

この地名は、地元を離れと「フリガナ」を付けぬ限り、百人が百人迄
読ぬのが実体である。

昔から何代もこの地に住している人々も、誰一人として、何故こんな地名が出来たのか知る者が無い。而し伝えられるいわゆる当り「ズッポウ」な説は甚だ多い。

その一

アイヌ語として解説している人々もあるようだが、別に私はこれに対し反論する訳ではないが、これによれば「モン」は静をいい「マ」は湖沼であり、讀って百間は「静かな湖沼」という事になる。と云われるが、そうばかりも言えない。

※ これに対して北海道の地名を採る。

北海道はアイヌによって名付けられたというモンの付いた地名は数ヶ所ある。或る程伊達政宗「ダテモンベツ」は噴火湾に位して附近には洞爺湖もあつて比較的静かな海に面しているが、北見の紋別はオホーツク海に面する相当の荒海と聞き及んでいる。

※ 古語に頼るも結構だが、序であるので二、三の例を挙げて

おきたい。

皆形 II 北海道利尻島の世名、これはもと「クツカンタ」と云われた。

享保一〇、一二月十一日死寂と在る。これで記録上の人物名は解明されよう。

第四 名称 雨下一無双 角丈衛についてであるが直接古文書には見当たらないが正統を誇るのに以前は天下であつたろうが、徳川三代将軍家光将代の正保三耳（一六四四）に天下一の名称が問題となり、獅子頭衣袋等には禁止された。更に五代将軍の綱吉時代の貞享四年（一六八七）に再度御触れが出た（下々に浸透しなかったのか、廿年経たのに）結果全国の天下一は書き改えられた。

その改名された例に江戸一、雨下一無双等がある。凡らこの禁止令に依つて天下一を雨下（昔音アメ）に由来し 雨の下に双ぶものなしと解釈せしめたものであろう。又この地名がハ字にも及ぶので獅子頭には書し違々、毎に配したものと考えられるのである。

鵜泊^{ウシノトマリ} ー は、元オシントマリ

種^{タネ} ー は、元「タネトシネ」ぞ「ナ・タ」又はイ ともある。

備^{ツクシ} ー は、元「クツオレ」と言われたというが、今では全く忘れ去ら

れてアイヌ語の意味も、はつきりしていないのが実状である。

「同害英一」氏の説 その二

和戸取前の方同氏の考察に依れば百間は「どどま」の転訛ではないかと云われている。或る程、旧は姫宮神社附近の台地と内板（現在春日部市内）の台地との間は低地で、水溜りや沼であり、豪雨ともなれば濁流がドウドウと流れ落ちる所でもあったので、この地形現象より起きた地名ではなからうかと云われているが、池の地方にも瀬の早い川岸で、其の水音を形容してドドメキ（百目木）とか、ドドメ（百目）と称される地もあり、ドウは百とも書かれ、土のくずれ落ちる崖を「ママ」又はマとも云われ「マ」は尚水面を意味する語でもあったと称されているので同害氏の説にも一理あると思われる。

田宮太田考」 その三

田宮太田考によれば、天平十三年（七四一）行基上人に依り、百間の地名が生じたと記されている。

行基上人が諸国巡錫の跡り、武蔵国出戸々原（宮代町）に上陸致したる所、ここに西甕と神明を祭祀する社地があり、この中間を計らしめたるに凡そ大樟にて百間あったので、この処を百間の里（もものさと）と

最後に旧家を調査した結果、部落形成の状況が浮び上つたのである。

順序不同 参考資料

一 参考太田家先祖 天正十九（一五九一）年

十月十三日越前勇進大禪院門

一 金子政右衛門家 寛永二〇年、

初代清左エ門（一六四三）先祖

一 松崎家先祖 一五七八年榎木屋

右追加調査報告とする。

前報告 深野家、中村家 野井家、

半多川家等からこの地の形成が解る

ことになる。其の後、藤田家中原

家などが浮び来るのである。

以上 現地に於ける素直であるが

獅子舞の研究資料は系統的なものか

少なく此後の同鑑に成されよう。

仮りに私のコース研究は次の様に

考えている。

一 伊勢山田 宮内少輔 内容

二 伊勢山田 刑部太夫 外宮

これらは同じであるが三以下は地蔵

方向があるので同じ様でも異う。

糸したという。この社地の中間に榎の木の大木があつたが、左を東神外（ひがしじんがい）右を西神外（にしじんがい）といい、総称して神外原と呼んでいたと云う。行基上人上陸後は、東神外の地を東村といい、西神外の地を西村と称し、その中間を中村と云うようになったが、「西光院の十二坊」が建つに及んで中寺村と改められ、総称して百間と称されるようになったとある。

又鎌倉時代には年貢として貢馬をなしたる事もあり、近隣の地に内牧駒込、馬林等地に秣馬（まぐさば）であつた。東村、中村、中島村、蓮谷村もありモンマは常時百頭の馬が年貢用として飼育されていたので、百馬といわれたとの説もあるが、モンマの称はそれ以前、よりのものと思考せられる。

久米原と馬

馬の話に關しては、官代町に久米原があるが古語は別として貢馬原と書かれた事もある。と聞き及ぶ。土地の古老が幼時に聞かされた話として「この土地は古来より米作地であつたので、久米原といわれた。」と語つてくれた事もある。

先年、岩井茂氏にも、一寸お話しした事もあるが、久米原に日本工科大学が建設のために土地の造成が行われた時、縄文中期より後期にかけての土層が出土された。昭和四十二年六月頃、当時百箇中学校一年生（高橋）哲夫君がその地を探索した事を知った私は早速出土現場に馳せつけただが残念ながら、雨既におそく現場はフルトナセによつて目茶目茶にされて埋めつくされていた。

獅子舞分類上の系譜

関東別派

- 1 伊勢山田宮内少輔外宮時代
- 2 伊勢、刑部太夫、内宮
- 3 奈良松園の紹介 富士権現不動
- 4 紀州熊野の紹介 真言密教系
- 5 山城国住人（京都）
- 6 尾張国 熱田神宮
- 7 駿河国住人
- 8 武蔵国住人
- 9 下總国住人
- 10 現代に続く

北越主流

- 1 伊勢（外宮） 2 伊勢（内宮）
- 3 奈良、熊野介在、三井寺及戸藏
- 4 御嶽山と山城国住人、時代
- 5 越前国住人
- 6 越中国へ
- 7 越後
- 8 現代につづく

角兵衛獅子もこの系統である。
又 関東、東日本海岸へも伝わる。

出土品は石油田一杯位、現に穀島君の処に保存されており、私の採集した物も僅かながら保存している。出土品は主として加曾利仁式の物が多く、其れ粗製石斧、管釜もあり、引續き弥生時代を述べ、当時のこの地は入江の浜旗台地として古代の聚落であつた。尤も台地として河川に沿つた湿地帯であり、農耕技術の進んでいなかった當時としては、灌漑には絶好の地であつたろう。

その後、附近は海風、枝の如き数多くの河川（乱流）によつて氾濫等が繰り返し、人々の生活の賜が失われたものではなかつたか。尚又地下水の流失甚だしく土地の低下を見、現在の如き低平地となつたものであろう。

四と、二、二と

埼玉古墳と前玉神社

日置 宗一

武蔵國のなかでも大きな古墳の最も多く群集しているところは埼玉県行田市埼玉の古墳であらう。埼玉という部族は今でも行田市に歸入されているが、以前は埼玉郡に属する大きな古村で群家の所在地であつた。正倉院文書戸籍帳山城國愛宕郡雲下里計帳、神龜三年（七二六）に、前玉郡と記し、石葉集には佐吉多乃、延喜式神名帳にもサキタマと記している。

※ ※ ※ ※ ※

今行田市の町はずれから東南、北平取に通ずる道を二軒も行くと道の

三 中仙道主流

- (1) 伊勢山田 外宮
- (2) 全 内宮
- (3) 田原國住入京都
- (4) 信濃國
- (5) 甲斐國
- (6) 上州
- (7) 武蔵國

尚れにしても武蔵國で混然一体となり、その類型もこの中から生れる。

四 奥州へは武蔵國を中心として分化される。（奥羽良俗志武蔵國新技術）

- (1) 伊勢(2) 伊勢(内) (3) 京都・尾張を経て美濃國と三河國經由との二途になるのが目立つている。これは室町時代末期から戦国時代にかけて武將の回封鎖で迂迴した時代があつた事を物語するものであらう。

(2) 武蔵から常陸經由が常で下野相馬經由が案外少ないのはどうした事だらうか。伏戸侯の影響

面側稻田のなかに古墳が隠々と横わっているのが視野に入ってくる。それらの古墳のうちには主なるものは、左手三百米ほどに丸墓山（丸墓山）と称せられる古墳がある。古墳としては日本でも他に類例を思ひない大きな古墳である。（現在では前方後古墳と証明される。高さ十六米、経百米、古墳は三〇と米ある。頂上は灌木が茂り兎窟しが良い。丸墓山の東方三百米のところには將軍山と称せられる前方後古墳がある。この古墳は明治廿七年癸卯され石廬が發見されたが、石廬は穿孔貝殻の附着した房州石を以て築かれ、天井は巨大なる鉄父石にて蓋をしてあつたと云う。又出土した遺物もおびただしい数にのぼっていたと言われる。

丸墓山の東南に箱荷山古墳があり、先年発掘され山頂の礎廬遺形が復元されている。（將軍山古墳出土品と共に出土品は資料館に展示）右手に大きな前方後古墳が遙をめぐりして横たわっている。二子山といわれており全山低い樹林に蔽われ完全な原形をとどめている。さらに其道を渡ると相對する位置に鉄砲山と称せられる前方後古墳がある。

鉄砲山と称せられるわけは、江戸時代に遊城がこの辺で砲術演習場としていたことがあるからである。鉄砲山の東方百米程のところに式内社の前王神社が鎮座しているが、この前王神社も社殿が古墳の上に位置しているのである。

この古墳は後世いちぢるしく変形され原形をとどめていない。

神社宮司の談に依れば、この古墳はもと前方後古墳であつたらしいとのことである。新編武蔵風土記稿は當時に関して次のように記している。

「社地の様、平地の田圃中より突出せる塚にて周り二町程、高さ三丈余、四方に喬木生い茂り、頂上僅か十坪ほどの平地にして、そこに小社

だろうか。

(4) 水戸から仙谷經由が主で出羽国は板谷峠でさえざられて立ち遅れているのが目立つている。そして一は南部……津軽方面へ通り過ぎる。その一帯が奥羽山系を横断して出羽国へ入るが、中々困難が伴っている。

(5) 出羽国へは越後から入るのと、駿波、近江、周防などは日本海西廻り經由の最上川舟運利用で先廻りしているものもある。

獅子舞に關する限り、山伏と修験道場が大きな役割りを果し、羽黒月山湯殿山の三山系が中心で武蔵、常陸、仙台とを結ぶ線が主流で、武蔵系はここで明治維新を迎え、紫雲村平塚で終焉を告げ、其の後は東山石山家荒谷の佐藤家を以って絶世継承は終つていたのである。

下町又里獅子舞の秘巻末公問の巻は伝統保持を意図するものでなく寧ろ衰微を促進させる方向にながら

を建つ」と。

以上のほか埼玉部落に現存する古墳としては、瓦塚、中の山（今庄堀を復元）、奥の山、殿宿山、ボツ子山と称せられるものがある。さらに現在はすでに開拓されて痕跡をとどめていないが古墳としての記録の存するものが廿三あり、その外記録に残されず、取り崩された古墳も数多くあった事であろう。

前王神社の東南方六百米ほどの処に「百塚」と云う地名があり、また遺物の出土された記録もあるが、今は塚らしきものは認められない。

このような武蔵国乃至関東でも珍らしい大規模な古墳群の存在は、何を物語るものであろうか。恐うに往昔、暖地を極めた国造の何代かに渉る一族を中心にした墳墓であるとしたか考えられないのである。

日本古墳文化の発達した地域は九州・畿内、関東であつて就中武蔵野の行田はその大きさと数においては、その主たるものである。これは、古墳時代は荒川や利根川の沿岸には舟による水運が開け、稲作に適した高い古代文化が開けていたためである。

武蔵野の歴史時代への発展は、この古墳文化と云われる豪族文化の発展に伴い地域的に村落が開拓されて行つた処にはじまる。

武蔵野にも農耕技術をもつた古代農耕文化と云われるものが六世紀以後萌芽したこの文化は、部落単位の豪族の文化とも考えられ、西から伝へられた高度の生活技術を持っていた。それは次第に富と権力を持つ豪族を育て死後を祀る盛土の古墳を築くようなこの社会を成長させていった。この時代の畿内地方にこの豪族の統一者の中から大和朝廷が出来、その勢力が伸びて来た。朝廷は勢力拡大を図るのに在地の豪族を勢力と富

ものとして吾々は残念に思うのである。その例として後継者の少なくなつた事実を挙げねばならない。

後継者育成問題

武蔵芸能の一分野として他の武蔵芸能とその性質上同じ筈なのにそれを古辞にとりわれるは時代逆行を喜んでいるに等しい。吾々は秘蔵にまつわる一切を新時代に対応しく解釈せられん事を希望して止まない。

下向久重獅子舞の龍頭型合装

埼玉武蔵芸能の獅子舞合装に幾つかの地味型として紹介されているが、武蔵特有の雷と水に関係多い利根川荒川等と結び付いた地域性の特異性の具現化である。

そこへ神教がもたらした支那思想の一種で潮（水龍）と龍（瑞光）に置きかえようとする民衆の願望が、の姿となつたのである。本来神の使徒たる鹿から（山国）平野の武蔵に相対しい龍型が発生したと見る。

の強弱を尺度に国造又は県主に任命した。(成務朝)武藏野には当時飛馬志ら其武蔵に於けて發展していた豪族であり、この指導者と見られる一族であり、出雲族の系統を以て有力な族長で、大己貴命を祭神とする大官氷川神社はこの族長の氏神であると考えられる。

前玉神社は埼玉県の故郷の中心に於て、鎮座し、延喜式内神名帳の武蔵國埼玉郡西産の中の「前玉二社」とあるのに該当するのが通説の様である。前玉神社を祀ったものが武蔵國造の一族であつたと云う事は、先づ間違いないことと云わなければならぬ。とすればこの前玉神社の一座は氷川神社のサキタマを祀つたと云う推測も充分可能であると思われる。前玉神社の祭神二座のうち一座が氷川神社の垂魂を祀つたものであるとして先づ間違としたいのば、前玉神社と古墳との関係についてである。「田島信司」によれば、もともと神社の社殿も古墳の下にあつたのであるが、近き、富士信仰の盛んとなつた時に古墳と知らずに小高い山の上に社殿を移して、富士浅間社を祀つたものであらうと云う。

現在は古墳の中腹に少社があり、祭神として「平花姫姫を」まつり浅間社の額が掲げてある。

富士信仰の盛んになつたのは、近き以降の事であるから、過去に於ての社殿は平地に在り、おそらく古墳を拝祠するような位置に在つたのではないかと想像される。即ち前玉神社の一座は元来この古墳に築かれた入玉殿でこれを祭つたものと解したいと思われるのである。

引用文献資料

埼玉県地名誌 荻原一三郎 北原四喜 武蔵野 桜井正徳 社会思想社
武蔵國武内社の歴史地理 荻原勇 永果社 埼玉の歴史 小野文雄 著同
埼玉県人物小辞典刊行会の埼玉人物小辞典 (甘泉書院)

郷土研究会の将来と

その姿を求めて思う

近時思想発表の自由化は歴史ブームと共に興隆の発展を見ている。何処の地域にも郷土研究に関する団体が一つや二つは必ずある。

而しその研究は殆んど狭い地域性を対象として行われ、古文書中心の文獻を金花玉巻としている。従つて口伝、伝承の古老の語など無価値なものとして放棄されていく姿である。

茲で思うことは文獻中心の探究も狭い地域性対象では断片的考究に止まり、その文獻の流れを把握する事が困難である。まして系統的な分野から抜けはなれるのは当惑である。そこに時局と概観とが問題となり地方の郷土研究会費では不可能な分野が置かれたりするのである。随つて地方の研究会は資料の発見と文獻そのものの断片的処理に終り易い。

大岡忠光と山県大弼

大 村 達

日光楓成道が岩槻市街を貫通し、幸手に向つて西へ折れると、渡江を過ぎ左手に古刹龍門寺が見える。同寺は禅宗曹洞派寄居正龍寺末で、創立は天文十九年（一五五〇）岩槻太田氏の臣匠枝若狹守が、高僧格叟貴蔵禪師に帰依し、禪師を所山として幸手に建立したのでに始まる。

随つて宝暦年間（一七五一—一七四一）第十九世西山大休禪師の時に法延殿殿をきわめ、宝暦六日大岡忠光が岩槻城主となると帰依焉く大檀越となり、以後大岡侯歴代藩主の崇敬に支えられて講殿堂一敷し、輪奐社堂の姿を呈したという。現在の同寺は明治廿四年四月、災火で烏有に帰したのを再興したものである。この縁で同寺は大岡忠光の菩提寺となり、境内に忠光の坐躰があつて碑面に宝暦十年四月、山県昌貞（大弼）謹誌の墨蹟がある。

山県大弼は幕府顯腹を圖つた明和事件の元凶として世上に歟に著るであるが、宝暦四年より六年間、大岡忠光に仕官していたのである。大弼仕官のことは幕府の手前をはばかりて、大岡家では後述のようにタブーとし、家臣の間でも表向きそれを口にする者は少なかった。大弼が忠光に登用された。並びに経緯にその関係は次の如くであつた。

大岡忠光は御用人として將軍家室に近侍し、その勢威は比類なしといわれたが、もとはといえど三河譜代の臣とはいえ、一介の旗本の類にすぎなかつた。出仕は享保九年（一七二四）八月、十三才の時水野侯の手

そのためにゲストを迎え學識経験豊かな學者に依つて体系的に置付けが行われる。それを亦金瓶玉茶として受け止めるのである。その信憑性について以前者より後者の方が遙かにあるわけであるが、時代と所に在つては、全部が必ずしも妥當であるとは限らない。

次に口伝、伝承など一向に耳を傾けたい即ち文獻にないから（裏付けがないから）と書つて見解を述べたいのが弊である。

ここに文獻中心の學者御原亮君の誤謬とが存するのである。更に口伝伝承の眞理性を一顧も与えられない全く偏過性に用する限り誤に等しいとして証憑にすら上らないのが弊である。

それと學究に志すもの、一考を要する所ではあるまいか。敢て一流の學者と雖も全部を調べつくしたものではなく未知の分野が数多く残されてゐることを知らねばならない。

引まで西丸小姓（庫米三百俵）挙げられたのが初まりで、生来誠懇、義
矩に通じたため次第に才器を發揮し、同十二年従五位右衛門に叙任、延
享二年（一七四五）吉原が退隱後、家重が將軍邸に就くや翌年側衆とな
り二千石を拝領した。

家重は生来多病で脆弱、言語波納し、忠光のみよく家重の言わんとす
るところを覺つたため爲に信任を得、片時も君側を離れず、家重が當中
で裁断を下す時は、忠光が代つて執行した。このため君寵益々篤く寛延
元年（一七四八）三千石、宝暦元年に五千石、併せて壹万石を領有し諸
侯に列した。

次いで宝暦四年三月首年寄、同六年五月側用人に転じ従四位下に叙さ
れ、数度の加恩で采邑も二万石を超え、岩槻城主に封ぜられたのである
ところが忠光には父祖以来の譜代の家臣固がなく、且つ異例の昇進であ
つたために、諸侯に列し江戸藩邸を与えられた後、藩邸や采邑世経營に
多額の家臣を必要とした。

そこで總州勝浦に一万石を領した宝暦元年以後、故藩君の子弟や、領
本の二、三男、祿を離れて他郷に流浪した浪人等から選んで家臣とした
山縣大光はその中の一人であつた。当時忠光は家柄よりも人物の才芸に
よつて扶持高を決めたといわれ、一芸一入扶持として大光がど芸あるに
依り、直ちにと入口を給し、勝浦陣屋の代官に任命したのである。

山縣大光は享保十年（一七二五）甲斐国巨摩郡原村与力領職の次子
として生まれ、如くして甲府の与力村瀨氏を嗣いたが、宝暦元年三月前
麥門が悪名主の畔を斬殺して逐電したのを隠したと疑われ、義家政易道
教の難にあつて旧姓山縣氏に復し、出府して医術で身を立てた。大光は

私は次の観点から其の同題に就いて
書き度い。懷疑は更に懷疑を主む。

一、戦争時代は異常心理の中に処理

される事実、始末を主眼とする他

① 穂道、根張、偽名、高級物件は

最下級品と共に存する異例

② 眞筆と称せられる偽筆、拓筆と

代筆（偽筆）

③ 他軍のおきかえ、遠隔の地

④ 逃亡と穂道、松門生酒と進駐行

⑤ 雅号と諱と諡と義家及世方の姓

氏継承等

二、足利、織田、鎌倉時代の例

① 北条時政（時正）正史では修

善寺を以つて終ると（尊承承繼）

② 義経の最後の許状 文治五年丙

四月二十八日（衣川討死の二日前）

③ 田仁の山寺入寂説 争界百集

④ 長曾我部盛近の同窓叫合の誘状

春見招待のかけことはの書状

⑤ 大石良雄の同志集合の状況報告

と説語、兎先戸澤侯奥方他二君へ

如にして學問を好み、祖傳學派の五味釜川に師事し、また三宅尚符に學んだという小河源村山王神社の祠官加賀見島瑄に故を受け、その尊王弁亂の說に感化を受けたのである。

江戸出府後の大貳は四ツ谷に任して洞君と称し、匡紫の傍ら家塾を開き「医事校札」を著わした。こうして医師としてすぐれた手腕をもちていた大貳は、時の頭賓大岡忠光に仕官し、魚鱗の利貴かな勝浦陣屋へ代官として赴任したが、平凡な代官職には満足せず、心中に深い寂寥を感ぜ、その心腹を甲斐の友人巨摩道人に書き送つてゐる。幸にも二年後の宝暦六年五月、忠光が側用人、岩槻城主に榮進すると、大貳は直ちに召還され、江戸帶懸橋藩邸に移った。当時忠光は家重に近侍し、將軍の命を老中に伝達するのを恥勢としたため、いまおい藩邸の枢機に与り、その地位は表面上老中に次ぐとはいへ、實際には老中すら慈を迎える程の實力を有していた。そのため江戸藩邸には、忠光の權勢を慕つて官途の昇進を圖る阿諛の徒が蟄集する状態であつたから敏腕の土山東大貳を擧用して医師兼儒官、または政治顧問役として新立の藩政、並びに藩邸の總務を執行させたのである。

忠光が大貳を重用したのは、大貳の博識によるものであつた。後年忠光の述懐によると、忠光は正徳二年（一七一二）江戸四ツ谷屋敷に生まれ、そこで成長したが、幼時四ツ谷仲蔵邸に住んでいた浪人某から、論語大學の素読を受けたのみで、ろくろく精読も受けず「誠に不幸の者」だ、といふのが實情であつた。このため側用向きの事は敏腕心に繰返し、その上家臣へ是非を相談し、退治後は大貳の意見を求め、是非を相正して、

三 中央學界の定説とするものにも未調査文獻の微日罕見で定説がゆりぐち、學界の権論に於いて群り去られんとする傾向、

その例

一向一揆の立役者 下岡櫻樹法橋の同題 石川合戦中心にのみ検討せられ、稻葉秋龍落後三年目に離散し永祿十二年奥州の寒村みぞのべ村の廿六日壽中の一頁として「下校法」願龍として既に窮乏し龍として願龍となつてゐる。

それが永祿を過ぎて天正年間に末だ一向一揆の指標をとつてゐるのである。一向一揆の背景には毛利氏と甲州武田氏であるが武田家はこの時には亡び毛利氏も未確立であるが、自ら毛利氏と組んで一揆の旗を掲げてゐる。これらは良いと「願龍は何人も居るから」と「河を石泉の人は何人もあつても良いが指揮をとる願龍がどう何人もあつて良いだろうか」と私は思う。

如何きを究うしたという。

この大岡家仕官の間に、大式は反幕勤王書の嚆矢とも言うべき「柳子新論」の著述に没頭していた。本書は皮肉にも主君忠光を中心として展開されていた。幕政に対する痛烈なる批判の筆でおおわれ、頭官にこびへつらい、賄賂によつて立身出世する者の横行する政情を深視痛憤し世情の矛盾を暴露して大義明分を明らかにしようとする烈々たる情熱に燃えたぎるものであった。本書成立にとり大岡家仕官は、村内式部の家曆事件と共に大きな意義をもつものであった。

柳子新論は宝暦九年（一七五九）二月完成したが、翌十年四月二十七日、主君忠光が病没し、柳子忠喜が岩槻藩主となると、忠喜の乞いで忠光の遺詔と行状記を作成し、岡家を辞したのである。

致仕後、大式は江戸八丁堀永島町に塾を開き、国体の尊厳と幕府否定を大声し、理路整然として門下生となる者多数に上った。明和四年（一七六七）時事の論議に敗れた桃井久馬等のために、大式の兵学は幕府に課税の企てあるものごぞん訴され、八月廿二日同志藤井右門等と共に縛に付き斬首された。

この厄が岩槻藩に報せらるや、藩では累が藩内に及ぶのを恐れて大式関係の書を焼き棄て、また明和八年藩主忠喜直接の口入れで、藩士兒王泉吾（斎初）を昌平賞に入れて、大式並びに彼の処つていた蘭医学派を排し、秘蔵する姿勢を示したのである。

以上

斯様に資料不足を堪にして定説が通るとは如何に無名の一員地方史研究の為努力する郷土研究会の会員は殊勞と云う外はあるまい。

「ここに地方誌編纂を志す多くの入々の努力と中央学界の連絡提援とを切實に愿うものである。」

これは単なる一例に過ぎないが、今後地方誌を創らんとする多くの郷土研究会の会員各位はお互に中央学界にもひるまず清達する必要を提起し将来の姿を見たいものである。

此の点から越谷郷土研究会員とする近隣の郷土研究会員の地方史研究研究会は極めて有意義にして且つ要所しき限りである。

創刊号たる会報発行に当り史跡めぐりに参加したり、文書取扱いや等に當つて得た体験を通して個意を記してこの空間を理め奮めを果たさう。

越谷市郷土研究会之則

昭和四〇・二・二三施行
第六・五・二三改訂

第一章 総則

第一條 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二條 本会の事務所は越谷市立図書館内に置く。

第三條 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり郷土史料の調査研究を目的とする。

第二章 事業

第四條 本会は第三條の目的を達成するため左の事業を行う。

一 郷土史研究の連絡とその啓発

二 郷土文化財保存の協力

三 機関誌の発行

四 その他本会の目的達成上必要な事項

第三章 会 員

第五條 会費は本会の趣旨に賛同するものを以てする

第六條 会員は会費として毎年度初めに金千円を納入する。(機関誌並に通信費を含む)

第四章 役員及び職関

第七條 本会に左の役員を置く。

会長 一名

副会長 一名

理事 若干名

幹事 二名

監査 二名

顧問 若干名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

理事は総会に於て会員の中から選任する。

顧問は理事会で推薦し会長が委嘱する。

幹事は会長が委嘱し、理事会の承認を得る。

監査は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

第八條 会長は会務を総理し本会を代表する。

副会長は会長を補佐し会長事故あるときこれに代る

理事は理事会を組織し会務の執行に当る。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に應ずる

幹事は庶務会計に従事する。

あとがき

待望の会報・創刊号も皆さまのお手紙に届く頃は緑一色に彩られる時でしょう。会報の紙が出てから既に久しい、特に昨年から……そして今年になって声の落なりが大きかった。

然し原稿が思ろにまかせず遅くなった事をおわびいたします。

昭和四七年度第二号の予定もありますので今から各会員一ツづつ願います。研究物、史跡めぐりの感想、感想或は会員の声としての希望など……改まつたものでなくとも結構です。概つてご寄稿おまち申し上げます。

真柳に在つてゐるさと越谷を偲ぶ方、或は越谷とのつながりなどを胸裡に刻みこむ方等、編集を終えて遙かなる方々を考へて居ります。どうぞ御愛読下さい。

— 編集者 —

表紙カッパについて

ごらのの通り久伊豆神社境内にある藤です。昭和十三年三月廿一日、県指定天然記念物に指定され、二百余年の樹齢と推定される。数百年の神池の一隅にあり、幹は根元からと本に分かれ、株廻りは七、二七米で、東西一四、五米、南北二七、二七米の柵全域に広がっており、花房の長さは一米余りである。

会報	創刊号	会費領布
発行日	昭和四七年三月末	
発行所	越谷市郷土研究会	
代表者	大野 伊右衛門	

㊦ 宮 老 子 343

宮 越 清 雄 343

水 野 芳 元 340

三菱銀行 支店長 343

三 上 滋 187

三 上 由 耶 343

三 原 吾 太 郎 155

㊦

武蔵野銀行 支店長 343

㊦

森 道 麟 343

㊦

八 崎 具 正 340

山 崎 寛 二 343

山 崎 久 吉 343

山 崎 善 司 343

山 口 微 芳 343

山 口 貞 雄 184

柳 瀬 壽 野 343

㊦

吉 田 泰 343

吉 本 喜 男 330

吉 田 政 一 343

㊦

鷺 尾 末 吉 343

渡 辺 隆 喜 343

越谷市 坂 山 2010~14

越谷市 南 越 谷 3~19~3

草加市 松 原 田 地 D38~202

越谷市 弥 生 町 133

東京都小平市上水本町 1472

越谷市 坂 山 1887~40

東京都台田谷区代田三丁目21~10

越谷市 越ヶ谷 1~2~8

越谷市 大 林 29

草加市 谷 塚 町 573

越谷市 伊 原 1787

越谷市 下 間 久 里 53

越谷市 弥 生 町 12~7

越谷市 南 牧 島 3260

川金井市 緑 町 1~4~37

宮代町 須 賀 1564~1

越谷市 弥 生 町 3~28

大宮市 三 橋 1~515

越谷市 西 方 2199~14

越谷市 北 越 谷 2~8~1

越谷市 大 沢 吉 川 1390~14

氏 名	郵便番号	住 所
野口 仁礼	343	越谷市本町 8~24
原 高 則	125	東京都昭島区 高砂町 高砂町地 16~1637
萩原 龍夫	173	東京都板橋区 南町 55
田 田 園 崇一	343	越谷市蒲生西町 1~8~83
平子 泰治	343	越谷市大里 575
田 深 井 源 司	343	越谷市伊原 985
深 井 長 希	343	越谷市伊原 419
香 本 政 憲	343	越谷市弥生町 9~20
藤 田 岩太郎	343	越谷市大沢 1~15~8
古 谷 栄	343	越谷市北越谷 2~13~2
田 中 間 清 利	343	越谷市柳町 3~23
堀 沢 秀 夫	343	越谷市越谷本町 2~1~30
星 野 昌 治	343	越谷市越谷本町 3~4
田 松 沢 和 一 郎	343	越谷市大沢 2~1~33
松 本 吉 五 郎	343	越谷市伊原 433
松 本 子 之 助	332	川口市朝日 4~17~24
松 村 丁 三	343	越谷市西園 250
松 下 美 佐 保	343	越谷市大沢 3416~9
堀 田 寿 子	343	越谷市南越谷 3~2~5 (赤堀保方)

氏 名	郵便番号	住 所
辰島 茂子 林 康子	343	越谷市 越谷 1047
田熊 仁之助	343	越谷市 越谷 1~3~8
谷岡 隆夫	343	越谷市 宮本町 2~201
谷 沢 孝	343	越谷市 東川林 16
田		
近田 淑子	343	越谷市 南越谷 3~7~18
田		
都築 八右衛門	343	越谷市 本町 3~29
田		
藤岡 勲介	343	越谷市 御殿町 2~4
雪野 秋雄	343	越谷市 蒲生町 18~49
田		
中野 実	343	越谷市 蒲生西町 1~5~22
中野 常吉	343	越谷市 越谷本町 13~26
中村 政之助	343	越谷市 上谷 147
中村 菊朗	341	三郷町 丹後 1685
中川 多田郎	343	越谷市 大沢 2~4~33
中川 精一	343	越谷市 赤山町 1~91
中沢 ため次	343	越谷市 柳町 2~10
中西 真朗	173	東京都板橋区 板橋 3~61~5
長野 虎雄	343	越谷市 大松 86
田 田 次男		

氏名	郵便番号	住所
田 有 勝 晃	343	越谷市北越谷 2~13~4
埼玉銀行 支店長	343	越谷市越谷 2~4~28
佐々木 資 郎	345	宮代町百面 3~9
佐藤 久 夫	343	越谷市蒲生西町 1~8~66
田 島 村 平市郎	343	越谷市大竹 438
島 田 裕 吉	343	越谷市弥生町 13~20
清水 龍 起	343	越谷市西方 65
白鳥 喜四郎	343	越谷市越谷 3~3~16
田 杉 田 政 男	115	東京都北区桐ヶ丘 2~8 N28~14 茗川方
鈴 木 勇	343	越谷市尚屈 528
鈴 木 勝	343	越谷市南百 55
鈴 木 浩	341	三郷町彦成 600
田 瀬 尾 哲太郎	343	越谷市本町 8~26
関 根 昭 治	343	越谷市蒲生 3657
関 根 敏 子	343	越谷市東方 2~300
田 高 崎 力	343	越谷市大沢 4~6~41
高 橋 一 雄	343	越谷市本町 11~22
谷 内 誠	184	小金井市栗井北町 3~1~17~46

氏 名	郵便番号	住 所	
萩原 英雄	343	越谷市 越谷 5~4~63	越谷市 越谷
岡田 貞吉	343	越谷市 坂曽根 1~6~6	越谷市 坂曽根
岡田 利彦	"	"	"
小川 信雄	273	船橋市 海神 6~4~12	船橋市 海神
川沢 正弘	334	川口市 安行原 1818~8	川口市 安行原
金子 啓	344	春日部市 大字八丁目 21	春日部市 大字八丁目
加藤 義昭	343	越谷市 西方 442	越谷市 西方
川上 丸之	343	越谷市 大沢 1~19~16	越谷市 大沢
木村 信次	343	越谷市 関間 155	越谷市 関間
木原 敏也	278	野田市 上花輪 154106E	野田市 上花輪
木下 半助	343	越谷市 越谷中町 7~20	越谷市 越谷中町
協和銀行 支店長	343	越谷市 越谷 161	越谷市 越谷
久保 和芳	343	越谷市 大字猿山 200~25	越谷市 大字猿山
黒田 富藏	343	越谷市 北越谷 5~5~5	越谷市 北越谷
小泉 市右衛門	343	越谷市 中町 10~5	越谷市 中町
小島 誠	343	越谷市 平方 150	越谷市 平方
小林 信一	343	越谷市 大宮 1004	越谷市 大宮
小森 鶴子	340	埴加市 旭町 3~13~12	埴加市 旭町

氏 名	郵便番号	住 所
石 井 敬 樹	343	越谷市 男 島 32
井 橋 順 一	343	越谷市 越 谷 3 ~ 5 ~ 5
井 橋 吉 蔵	343	" " 1 ~ 4 ~ 3
石 塚 吉 男	343	" 北 川 崎 77
石 塚 良 造	343	" 大 道 54 ~ 3
今 井 正 義	343	" 互 産 根 1 ~ 3 ~ 17
岩 井 茂	176	東京都 練馬区 豊 井 3 ~ 21 ~ 8
国		
上 原 麟 之 助	343	越谷市 上 国 又 里 34
植竹 寿 行 徳 門	343	越谷市 伊 原 2 ~ 40
柳 津 昇	330	大 宮 市 南 中 野 907 ~ 3
国		
遠 藤 世	121	東京都 足立区 伊 興 町 大 南 1659
国		
大 野 伊 石 徳 門	343	越谷市 客 本 町 1 ~ 1
大 沢 弘	343	" 越 谷 本 町 8 ~ 1
大 沢 初 石 工 門	343	" 菱 塚 674
大 塚 伴 伴 鹿	343	" 東 柳 田 町 9 ~ 7
大 塚 小 学 校 長	343	" 大 竹 147
大 天 未 吉	340	八 潮 町 木 曾 根 449
大 空 下 二 男 " 栄 子	343	越谷市 東 小 松 79
岡 安 世 蔵	343	" 増 林 1831
大 村 道	339	岩 槻 市 上 野 422 ~ 17

会 員 名 簿

昭和47年4月現在

五十音順 敬称略

氏 名	郵便番号	住 所
因		
会 田 平 蔵	343	越谷市大沢 3~12~11
会 田 俊	343	" 神明町 2~1
秋 山 長 作	343	" 尾曾根 1~10~17
秋 山 邦 光	330	大宮市佐知川学園 228~40
浅 井 堅 教	343	越谷市別府 217
浅 子 亮 一	343	" 大沢 3~16
朝 日 し ぶ	340	草加市水川町 1122
天 野 征之輔	339	岩槻市本町 4~10~8
新 井 英 彦	339	岩槻市徳力 690
新 井 英 夫	343	越谷市西新井 999
新 井 鑲 久	363	北見郡標川町坂田 1488~2
新 井 隆一郎	343	越谷市下町又里 1377
荒 井 光 一	343	越谷市越ヶ谷 3~5~5
有 瀬 隆 夫	343	" " 中町 8~26
新 井 小 英	343	" 西新井 153
因		
石 川 正	343	越谷市越谷 2~31~21
石 川 尊 生	343	越谷市花田 184
石 川 正 美	349~02	白面町篠津 1818
近、谷 龍 市	343	越谷市西方 2348

越谷市郷土研究会

昭和47年4月現在

役員名簿

順序不同
級款 呂

会長 大野伊石衛門
副会長 石川 正

理事	大	沢	弘	秋	山	長	作
"	大	塚	伴	有	通	竜	雄
"	長	島	喜	水	下	半	斯
"	井	桶	磯	小	泉	市	工
"	荒	井	光	藤	岡	高	介
"	七	星	国	本	岡	清	利
"	越	田	岩	高	崎		力
"	新	井	英	中	野		実
"	竹	内	敏	佐	藤	久	夫
"	川	林	信	小	島		誠
"	上	原	麟	加	藤	義	相
"	岡	安	忠	新	井	英	夫
"	中	村	政	山	崎	寛	二
"	八	嶋	晃	岩	井		茂
"	三	原	善				
"			太				

幹事	水	村	信	次	谷	岡	雄	夫	日	園	宋	一
監事	瀬	尾	若	太	郎			野	口	仁	礼	
顧問	市	長	義	長	森	有	長	其	他	等	諸	君
	被	原	龍	夫				山	口	貞	雄	